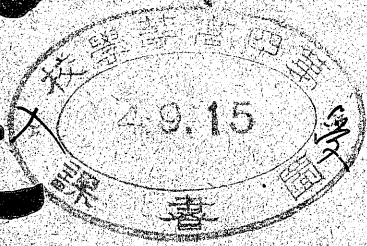


明治三十一年十二月二十二日發行

# 北辰會 雜誌



(非賣品)

第貳拾壹號

第四高等學校北辰會



北辰會雜誌第二十一號目次

論 說

戰爭論(承前)  
漢學に就て

史 傳

史海指針(第三)  
佛國大戲曲家コルネーユ傳  
橋本左内

吉田 堅治  
黒 子 軒

浦井 恒堂

潮 來  
文 濟

雜 録

觀躑躅而有感  
プロバビリチーの一問題

市村 塘

講演  
筆記  
北條 校長  
鈴木 庸生

明光 漁郎

文 苑

久我庄七の傳

紫 影

落 葉  
遊魂録

花 廼 舎  
紫 水

薄 紫(三)

千木花樵人

遼東原

松 風

運動會戰勝者の頌歌

霞 生

冬日詠十首歌

葉 舟 生

歌四首俳句廿六句

花 廼 舎 正義

皇朝史略摘註序

村上 函峰

與楮公書

菅 穀

水 喻

石田 竹溪

法海餘滴(節錄十首)

黒 子 軒

詩七首

雜 報

校裡の冬○湖神怒る○豪氣堂々○推心録○寸鐵  
數件○柔道紅白勝負○運動會記事

北辰會雜誌第二十一號

論 說

戰 争 論 (承前)

吉 田 堅 治

車○轉○、馬○蕭○蕭○、行○人○弓○箭○各○在○腰○、耶○孃○妻○子○走○相○送○、塵○埃○不○見○咸○陽○橋○、牽○衣○頓○足○關○道○哭○、  
哭○聲○直○上○于○雲○霧○、道○傍○過○者○問○行○人○、行○人○但○云○點○行○頻○、或○從○十○五○北○防○河○、便○至○四○十○西○營○田○、  
去○時○里○正○與○裏○頭○、歸○來○頭○白○遠○成○邊○、邊○亭○流○血○成○海○水○、武○皇○開○邊○意○未○已○、君○不○聞○漢○家○山○東○二○  
百○州○、千○村○萬○落○生○荆○杞○、縱○有○健○婦○把○鋤○犁○、禾○生○隴○畝○無○東○西○、况○復○秦○兵○耐○苦○戰○、被○戰○不○異○犬○  
與○雞○、長○者○雖○有○問○、役○夫○敢○申○恨○、且○如○今○年○冬○、未○休○關○西○卒○、懸○官○急○素○粗○、粗○稅○從○何○出○、信○知○  
生○男○惡○、反○是○生○女○好○、生○女○猶○是○嫁○比○隣○、生○男○埋○沒○隨○百○草○、君○不○見○青○海○頭○古○來○白○骨○無○人○收○、  
新○鬼○頌○冤○舊○鬼○哭○、天○陰○雨○濕○聲○啾○啾○、

是れ豈杜少陵が兵車行の詩に非ずや、詞意沈鬱、音節悲壯、一詠すれば、萬解の愁緒胸を刺して溢るゝを覺ゆる也、嗚呼戦争、これ何たる悲劇や、昔は鳳闕は巍峨、今は則ち頽垣新壁をふまゝ、昔は玉河の灣環、今は則ち荒溝廢岸と成る、矚目十里、草枯れ、蓬断は、腥風凜々毛髪を吹きて寒く、鳥雀聲悲んで黄昏に飛ぶ、傷ましい哉、十萬の師意氣軒豪、勇氣鬱勃、朝に長安を去りしも、榮枯咫尺變り易し、夕には即ち肝腦半が原頭に塗れて萬骨野に狼藉し、膏血草を濕らし



て、無定河邊半輪の月、空しく一の昧悽色を帯ぶるあるのみ、蒼々たる蒸民、彼等豈兄弟ならんや、彼等豈妻子なからんや、假令國難に殉死して芳名千古に朽ちずとはいへ、兄弟妻子たるもの、其胸臆の悲痛そも奈何のありや、今より誰と共に樂み、誰と共に語らん、兄弟道路に孤獨を歎じ、妻は閨中に薄命の涙を灑ぐ、戦争も亦酸ならずや。

戦争は、又將に完美の域に赴んとする諸種の事業を驅りて、悉く萎靡沈滞せしむるもの也、政治といはず學問といはず、道德といはず商業といはず、苟くも戦争に依りて、多少恐態の波濤を蹴起せざるもの殆んど稀あり、政府は不時の冗費の爲に、政務滞り、政績揚らず、莫大なる賦斂は、轉た民人の歎と爲すも、皆軍備の爲に吸收せられて、民治の淑慝、地方の利害等は、嘗て執政者の念頭に上らず、遂に藟々として不平の聲、道路に滿つるに至る、よし又、萬一戦勝の幸運に際會して、幾何りの償金を收むるも、戦後の創痍は、中々之を以て癒ゆ可くもあらず、言はば蒼海の一滴、泰山の一簣も釋ぶべきのみ、況んや、新版圖の統治、外債の處分、兵士の慰勞金、火器芻糧の費用等、苟くも一たび手を翻せば、萬金立どころに消散し去る如き事業、累積して山を爲すをや、而かのみならず、戦争は内國の資金を擧げて、中央政府に集中せしむるを以て、都府の一部を除きては、一地方として、金銀の不足を告げざるはなく、商業は沈滞し、會社は事務を中止し、物價は暴騰を告ぐ、加之、戦争の影響する處、細民の職業を枯落せしめ、好一時とは言へ、此に非常なる不景氣の社界を現出せんとす、是に至りては、彼等細民は腦裏固より勝敗の數あらんや。

然らば戦争が國民の精神に致す刺戟は如何、悲しき哉、是にも吾人は其害ありて益なきを見るあり、勿論こは戦れ結果奈何にとりて、自ら赴を異にするものあり、若し百戰百勝の効榮を收むる時は、國民をして踴躍欣喜に念に堪えざらしめ、愛國忠義の念、効名奮發の心、沛然として國內を風靡し遂に義憤の激する所、道義の迸發する所、凝つて蛟龍捲雲雨底の大事業となるの、又未だ必ずしも知る可ぶざる也、然れ共、勝つて兜れ緒をしむるとは、先哲の警戒にして、概して戦勝國の人民は、矯滿の志素長じ易く、徒らに自ら高く標置して、他を漫罵し、他を輕侮し、曩日の節操謙遜、若しくは質素の美德は、忽然として地を拂ひ、驕慢風を爲し、華奢俗を爲し、今日の戦勝は、却て後日の深患を醸成するの素因たるに至りては、豈畏れて怖れざる可けんや、若夫れ勝敗地を代へて敗衄の餘、遂に城下の盟を乞ふに至るとせよ、其結果果して如何あるべき、般鑑遠きに非ず、印度の今日は如何、支那の末路は如何、一たび屈するは膝遂に伸ぶ可らず、時事を慨するの良臣、奇材を懷て山野に勇退し、唯夫れ、奸官宮廷に比周し、佞臣は權謀を弄するを見るのみ、虎器を擁するの天子は、一夜の宴安に千金を豪奢を戦はし、日々の耽溺に馳騁觀を爲す、上下是を以て愈々壅隔し、姦徒相結んで交々構陷し、流弊百出、亦救ふ可ぶず、民も亦卑屈厄弱、自ら支持し難く、蠢々として昏憤其日を送るのみ、假令、平常無事の日に當りては、金匱無缺の國、一朝傾廢れ憂なきが如しと雖、關鍵一たび緩まば、勢奔馬の逸するが如く、良夫の術と雖、復び衝勤を施すに由なし、惰ては、宗社墟とあり、禾黍空しく離々、千載の下、亡國の難を爲す者、豈憐むに堪ゆ可けん哉、吁、豈憐むに堪ゆ可けん哉。

最後に吾人は、戦争の尤も深刻なる害毒として、フヒテ氏の兵制淘汰と數へんとす、蓋し優勝劣敗の理勢は、社會の須要の定則たり、弱者依て以て衰滅につき、强者依て以て愈々繁榮す、社會の發達、人文の進歩、亦一に此理勢の支配に依らざるはなし、若し夫れ反之宇内の人衆か、優敗劣勝ある背理の下に生息せん乎、吾人は只、退嬰衰弱、居然として冷却死滅れ世界あるを豫想せんのみ、然り而して、戦争は實に、此至殘至酷ある淘汰法の厲行者たり、是れ豈驚く可はずや、何を以て然か言ふ、想ふに、戦争は兵卒れ干與する所なり、兵卒は嚴密なる躰格検査によりて撰摘せらる、不具者は排斥せらる、也、怯懦者は排斥せらる、也、犯罪者は排斥せらる、也、唯だ夫れ、健全なる軀體を有し、多少教育の素養あるもれ、初めて以て、其隊伍に加はることを得可し、換言すれば、軍隊即ち一國の金鐵、一國の精粹なり、人類の尤も完璧に近きもの、集合體あり、然り而して、此金鐵を挫き、精粹を抜き、此集合體を殲滅するは、彼此最後れ目的に非ず、耶、交刃數合にして、偉大の士、雄猛の卒、前後相尋で斃れ、一戰二戰三戰して、兵革猶ほ止まざれば、遂に悉く殄滅し去りて、殘るものは羸弱不具、紈袴の子弟にあらざれば、市井の無賴れみ、亦往時雄偉の快丈夫は、國中に隻影も止めざらんとす、嗚呼、造化翁自然の配劑として、優劣敗ある天則を設けて、民人をして繁榮福利に露に沐せしめんとするに拘らず、何が故に、地上の蠻風は、一々之を破壊し去らんとする歟、何たる不法ぞ、何たる矛盾ぞ、霜を踏んで堅氷に至る、余輩は蠻風の盛なるを見て、甘雨の甚だ遠かざるを知る也。以上は専ら、人倫道德の方面より、戰の兇器なるを論究せしと雖、猶ほ一面の遺れるもれあり、經濟上に及ぼす損害之れ也。

二千年の昔、天下の擾亂紛として麻の如かりし春秋の時代にあたりて、孫子の炯眼達見なる、厲聲疾呼して、凡そ兵を用ふるの法、馳車千輛、革車千乘、千里に糧を饋る、内外の費、賓客の用膠漆の材、車甲の費、日に千金を費し、然る後初めて十萬れ師を擧ぐべしと、説きぬ、社會の發達未だ幼稚に、生活の程度低く、生産の力進歩せざる彼の時に在りて、既に日に千金を消耗す、尠なかつとせず、況んや、各國競ふて軍備を膨大にし、軍制を振起し、軍器は屬々發明せられ、其精銳巧緻、昔日の面目を一變したる今時に於てをや、昔日の戦争は、個人と個人との間の戦争にして、相手を格闘して、之を蹂躪すと言ふが、戰至要の目的、銃槍劍戟、干戈弓箭は、只だ贅澤ある扶助物たるに過ぎざる觀ありき、即ち腕力之れ戦闘あるを以て、曲亭氏が所謂、「虎を擒にせる膳提臣が勇、牛の角裂く富田の三郎」が力は、取りも直さず、戦闘力の要素にして、これあれば勝ち、これなければ敗る、斯の如きに過ぎざりき、今日に在りては大に然らず、腕力は器械力と換へられ、個人の格闘は隊伍の衝突と變りたり、兵士或は虎賁の猛力を欠き得べし、唯だ器械は、あくまで精銳あつざる可らず、鈍なる可らず、よし運籌戰略の技術如何に機敏あるにもせよ、若し器械力にして、微弱事に堪えざらんや、悲しい哉、驚駭の焦心して走る、適々以て虎狼の餌食たらん耳、此を以て過ぎに數十年間に於ける、軍器の發達改良は、眞に驚く可きものあり、軍用鐵道を敷かれ、軍用電信は架せられ、巨砲礮丸を以て城塞を破壊すべくんば、直に築城の術を以て之を防がんとし、一たび武器の發明せらるゝや、更に嗣々に精妙緻密の改良を以てす、昨日の「エンペール」銃は、今日の「アルミニ」銃となり、今日の「アルミニ」銃は、明日の「モゼ



ル銃と變ぜんとす、其他軍用自轉車は如き、水雷艇の如き、潜水船といひ、輕氣球といひ、萬端の戰器其設備や壯大にして、其裝置や整然たり、嗚呼、這般の利器を以て、戰場に相見ゆ、和局一たび敗れ、事干戈に及ばば、之に伴ふ軍費の如何に莫大あらんかは、三尺の童子と雖、尙ほ且つ推察するに難からざる也、げに、名譽の決算表を製せんとして、却て破産れ決算表なるを發明せりといふ、フレデリック・パッシーの言、徒に鬼面赫兒の放語にあらざる也、吾人は千頭清臣氏が、此点に關し精細ある研究を捉へ來りて、其經濟上に於ける損害の一端を髣髴せん哉。

歐洲大陸に於ける、一千七百九十三年より一千八百七十年に於る十三大戰の費用及戰死者の數を概算すれば左の如し。

|                        |   |        |      |         |        |         |   |
|------------------------|---|--------|------|---------|--------|---------|---|
| 一七九三—一八一五、英            | 佛 | 戰爭     | 百九十萬 | 人       | 壹百貳拾五億 | 圓       |   |
| 一八二八、                  | 露 | 土      | 戰爭   | 拾萬貳千人   | 貳億     | 圓       |   |
| 一八三〇—一八四〇、西班牙葡萄牙の      |   | 内亂     | 拾六萬  | 人       | 五億     | 圓       |   |
| 一八三〇—一八四七、佛蘭西及アルゼリアの内亂 |   | 内亂     | 拾壹萬  | 人       | 參億八千萬圓 |         |   |
| 一四八、                   | 歐 | 洲      | 内亂   | 六萬      | 人      | 壹億      | 圓 |
| 一八五四—一八五六、英            | 佛 | 露の     | 戰爭   | 四十八萬    | 人      | 參拾億五千萬圓 |   |
| 一八五九、                  | 佛 | 壤      | 戰爭   | 六萬三千人   | 四億五千萬圓 |         |   |
| 一八六三—一八六五、合            | 衆 | 國の     | 内亂   | 六十五萬六千人 | 七拾四億   | 圓       |   |
| 一八六六、                  |   | 普魯西墨西哥 | 戰爭   | 六萬五千人   | 壹億五千萬圓 |         |   |

|            |             |    |       |        |        |           |   |
|------------|-------------|----|-------|--------|--------|-----------|---|
| 一八六六、      | 佛蘭西及奧太利     | 戰爭 | 五萬壹千人 | 貳億     | 圓      |           |   |
| 一八六四—一八七〇、 | ブラジル及パラグアイの | 戰  | 參拾參萬  | 人      | 四億八千萬圓 |           |   |
| 一八七〇—一八七一、 | 普           | 佛  | 戰爭    | 二十九萬   | 人      | 參拾壹億六千圓   |   |
| 一八七六—一八七七、 | 露           | 土  | 戰爭    | 十八萬    | 人      | 拾九億       | 圓 |
|            |             |    | ノ     | 四百四十七萬 | 人      | 參百零四億七千萬圓 |   |

(未完)

漢學に就て

醉墨居士 黒 子 軒

砲聲一發浦賀に轟きしより泰西の文物頻りに輸入し茲に三十餘年細大どなく美惡となく彼に摸倣し竟に千有餘年來聯綿崇尙し來れる漢學は漸時萎靡し呼びて漢學者と做す聞く者は忽ち固陋の感を發て暗に之を厭ふ呼ぶに洋學者を以てす聞く者は直ちに新穎の感を起し暗に之を喜ぶ此を以て傍ら洋書を繙く少壯漢學者或は時流に迷ひて徒に洋學者の相貌を假裝し己が本領を韜晦するものなきにしもあらず彼の征清の役起りより一層斯學を厭却するの風生じ甚しきは漢學全廢論を喃々喋々唱ふる者出づるに至り斯學は何物たるを了せず朝野を問はず之を度外視し敢て顧みざるもれ、如く實に憤慨に堪えざるあり

抑地方にありて今日の事業を興し今日の業務に當る者は洋學に力にあらずして斯學の力に由り其の後進にして父祖の産を繼承する者若しくは文明の學問に志す者亦洋學に力にあらずして漢學の力に由る彼れ洋學の美處優處長處妙處も漢學の媒するに非ざるよりは決して之を社會に照會せ

むること能はざるあり福澤翁の手になりし世界國盡窮理圖解西洋事情は實に社會全般人民の思想を一變せり箕作翁が佛蘭西六法は之に次て又耳目を一新したり蓋し是れ皆漢文の作用あり流派なきも二十三年煥發ありせりし尋倫道德の勅語も斯學に於ける歷代聖賢の述作に係る經史諸子百家の書に據らずして將た何の書に於て之を講明せんとするや今や斯學は支那に勿論日本に用ゐられ朝鮮に用ゐられ安南に用ゐられ即ち大東洋の大半に用ゐるゝなり然らば競走場裡に勇飛し東洋に覇たらむとする者安んず之を利用せざるべけんや斯く須臾も忽にすべからざる緊急學問にありしが輦轂の下は勿論遐邇到る處斯學の校舍寥々公私は諸學校にて之を冷顔無視し以て洋學の奴となすが如きは尤も余れ解せざる所にして今日左の稿を草するに至りしも亦慨嘆の餘に出づるのみ

漢學は我國に於ける關係　漢學の始めて我が國に輸入せしは早き時代にあるなると雖も歴史に徴すべきは晋末宋代に至り韓地を経て六朝の經學を輸入し繼體帝の時に五經博士を徵されし後は律令學も相繼ぎて入りたりん頓がて佛敎も傳はりたれば經學法學を政治學と兼て官府の文を習はしめ宗敎は神道に佛敎を加へ神儒佛の三道にて世道人心を支配せり次て推古は朝より學生を隋に遣はして律令を學ばしめ其の結果に因りて大化以後の律令撰定及び修史とあり遣唐使續々輩出し大學國學の規模も備はり經學法學大に興隆せり爾後表頽或は隆盛幾多の變遷を経て徳川氏に至り斯學大に盛大を極め經世治國の技を擁して天下に躍飛する碩學鴻儒研磨碎勵東西に奔馳し將軍幕下に昌平黌を設立し以て幕臣の子弟を養生薰陶し諸藩にも亦各藩學を設けて斯道の講

究を怠らざりし此を以て經國治世の術大に擧り一時治國平天下の美を見るに至れり即ち我國維新の大業を開きて今日の隆運を致したるも畢竟するに斯學之が原素とあり之が根底となりて以て此に至りしも既に非ざるや要するに先王の漢學を採用して國學となし玉ひしは單に其の文字を採り給ひしに非ず又唯其の文章を學び給ひしにもあらず即ち大漢土聖賢の道は自ら我が天祖國を肇め給ひし洪謨と密合し又我國態人情と相符合して國家を億萬斯年の久きに維持し給ふは斯道に非ずむば不可なるを以ての故に非るかかむや然らば漢學は獨り漢土の學問に非ず即我國の學問と謂ふも豈不可ならむや乃ち其の輸入してより今に千有餘年其の間自ら日本化したる所ありて讀方音聲の如きも皆彼の國と異なり我が正史實錄より其の他の雜書に至るまで漢文にて記述せるを多しとす且つ日常の通用言語も十中の四五は漢語に屬せ然らば漢文は既に歴史的に日本の一種の文學となりたるや明けし

#### 漢學の範圍

漢學は其の範圍頗ぶる廣く渺として海洋の如く諸種を學科を包含す夫れ仲尼孟軻の堯舜を祖述して治國濟民の道を説きし論語廿篇孟子七篇の如き又曾子子思の仲尼の道を廣めて治國平天下の術を述べし中庸の如きは所謂政治學にあらずや然りと雖も孔孟は其の迹を説かずして其の心を説きしのみ故に其の説く所悉く政治學の神髓として今日に崇奉すべきものにあざるはあり又修身齊家を重んじ仁義忠孝を説き以て世道人心を支配せんとするは實に孔孟の本領とする所即ち修身倫理の學に非ざるや易は陰陽變化の妙を説き老聃莊周は虛無自然の理を唱へ周濂溪は大極圖説を著はし無極にして太極と説けり又曰はく五行は一陰陽あり陰陽は一太極あり太極

は無極なりと程子曰はく天地の精を備へて五行の秀を得るものを人となすと此等の議論固より哲學として講究すべきものなり孟荀揚韓は皆人性の説あり張橫渠に至り始めて氣質の性天地の性の目わり又曰はく心は性情を統ぶるものなりと程子曰はく性は理なり朱子曰はく人の性は天に出づ王陽明曰はく善なく悪かきは心れ体ありと是れ即ち心理學あり法律學は申韓の刑名より開けて歷代成律あり理財學は太公九府の圖法景王の子母錢己に其の端を開き漢武に皮弊あり魏に粟米を用ひて貨幣を廢るあり金銀幣あり銅錢あり降りて交鈔會子の紙幣あり其の他文學は古より其の盛を極め詩の三百餘篇は詞葩渙發せる周浩殷盤は幽邃深淵なる降りて李白子美の詩に於ける韓柳歐蘇諸家は文章に於ける皆鬼神を啼らしめ天地を感せしむ是れ統然文學として講究すべきもれ又春秋の片言隻語の褒貶黜陟史記の考證廣博漢書の法度整齊國語左傳の簡潔明晰等しく以て古今の成敗を論じ聖代の丕積を述ぶ皆是れ史學として研究すべきものなく豈に其れ學の廣く包含せる此に對比して遜色なき者果して幾何かある

漢學の我國に對する功用 漢文の功用少しく前陳せし今秩序的將又詳細的に述べれば左の三に總括し得べし第一德義を養成す第二日本文學に與りて力あり第三東洋の志氣を發起す第一抑德義を養成し道義を完全せしむるには聖賢哲豪の言行を明にし忠臣孝子の美事を示すより捷徑なるはあり而して其の言行美事を明示するは其れ民情風俗に相近きを要す故に其の聖賢哲豪忠臣孝子は外國の人よりは自國の人なるを要し西洋の人よりは東洋の人あるを要す且つ其れ言行美事は直接に聽き直接に視るが如くならしむるを尙ぶ然るに古より我國の聖賢哲豪忠臣孝子れ言行

行美事は漢文に顯はれたる者多し此を以て先哲聖賢の言行を知り忠臣孝子れ美事を窺はんとせば漢文を棄て、他に途なきあり又支那聖哲れ言行の如きは西洋に比して我國体に能く適し其の成染の度も亦速かり而して千有餘年の久しきに亘りて我が世道人心を維持せり故に彼の聖賢の經百家の傳一讀せば其の人に接して其の談話を聞くが如く以て反省三顧我が德義を養成すべきなり豈に漢學を輕視して可からんや

第二今日我國の文字と定むる平假名片假名の如きは皆な漢字より出て日常通用の言語も漢語其の儘を用ゆるもの十中四五に屬す故に漢文の我文學に與りて功ある今更言はずして明かり抑漢士は文學の國あり仁義の國なり彼の春秋の片言以て正士を褒め隻語以て佞夫を貶し孟軻の東奔西馳七篇を著はして性善を説き以て時弊を痛論し馬遷の史記斑固の漢書左氏の國語左傳皆な以て成敗を論じ丕積を述ぶ或は潛菴の封事天祥の正氣歌の如きは國家の前途を策し丹心を吐露す其他孔明の出師表及び李密れ陳情表の如き長く世道人心を維持し道義獎勵するあり畢竟するに皆な雄渾雅健壯大箇勁一讀して義士を勇ましめ再讀して懦夫を起さしめ忠臣孝子は眼涙を濺ぎ不忠不孝は皆な汗を流す而して和文は元より漢文れ影響を受くる大かりと雖も古來多くは巾幗脂粉の手になりて幾多の物語若しくは日記の如く情を伸べ感を發せる最も巧ありと雖も等しく優柔清婉にて辭氣壯ちらず格調高からず故に雄偉宏逸の思想を伸ぶる能はず光緒萬丈の議論を發するを得ざりし徳川時代に至り和文專修者尙は未だ之を察せず妄りに優柔を愛し清婉を貴ひ紫氏の餘瀝を翫り清氏の糟粕を嘗め思想なく議論なく氣骨なく血に涸れ涙に乏しく到底漢文と對比するに足るべ

きものにあらず然れども漢學者の呼文即ち春臺は獨語鳩巢翁は駿臺雜語白石の折焚く柴記の如きに至りては始めて味ふに足るべき者あるを覺ゆ區々文法の誤謬を以て此等の作を斥くるは文章を知る者にあらず今日論文を草する中にて大文字を屬するに足るれ手腕を求むれば徳富蘇峯朝比奈泉諸三宅雪嶺志賀矧川諸氏あるべし而して諸氏皆漢文の素養あり故に其が文見るに足るあり落合直文氏の和文界にありて在來の諸家を駕して異彩を放つも多少漢文の素養あるに由れり而して今や新聞雜誌に及び各種の日刊月行物多くは杜選粗茶殆んど視るに堪えざるなり嗚呼此の如くして古今の成敗を自由に討議し明治聖代の不積を千載に傳へんとするは亦危き哉蓋文を作る必ず孔子の如き筆誅なうるべからず孟子の如き達論かかるとかからず馬遷は雄麗斑固の奇拔あらざるべからず其他澹菴天祥の如き丹心孔明李密の如き誠實皆な以て法とあすべきなり此く論じ來るべし日文文章を作爲するもれば須らく漢文を作るべしと鞭撻して之を獎勵するものゝ如く見ゆれども決して然らず純然漢文は漢土の文なり我が國に文にあらず今日之を學びて之を作爲するは文壇の餘事のみ花のみ然れども漢文は辭氣壯にして格調高く遙かに我が優柔清婉あるに勝れり此を以て十分遠博に涉獵し十分精意に研究し熟讀反復能く之を咀嚼し合英咀華能く彼の辭氣の壯格調の高さを取り以て我が國文の語格の平易にして秩序整然たるものと融化渾成して明治文壇上一機軸を出さば雄偉宏逸思想は伸ぶべく光燄萬丈の議論は發すべし豈又快からずや

第三凡そ其の國の志氣を養成し氣力を煥發するは皆其の國獨特の國語あり即ち英には英語あり佛には佛語あり獨には獨語あり前に述べし如く漢文は東洋大半に布及し以て氣派を維持するも此

かれは東洋に志氣を發達し東洋に氣力を煥發せんと欲せば此を棄て、他に途あふざるあり今や強國と稱するものゝ多くは西洋にありて其の視聽一に東洋に萃まり推剽貪婪武を鍊り兵を鍛ひ虎視眈々攫噬掠奪の慾を逞ふし既に其の爪牙に觸れ其の呑嚙に逢ひたるもの東洋中亦甚ぶ多し豈に慨嘆の極にあらずや嗚呼こが不俱戴天の仇を復し將來其の害毒を未發に拒がんと欲せば須らく漢學を隆興せしめ以て東洋人種たる觀念を誘起し能く東洋の志氣を養成し東洋に氣力を發揚せしむるにあり嗚呼漢學の功大なりや

逐次漢學の講究法進みて舊來漢學者流は固陋偏僻今や如何して免除すべきか術等漸々滿腔の熱血を濺ぎて當雜誌を汚がし以て諸子の斧正を乞はんと欲するも既に紙數の許さるありて遺憾千萬次號に聊り愚考を吐露せんとす請ふ了せよ

For I have followed thee alone, alas! part,  
Thoue poetry, most thankless, breadless art! Hyme.

史 傳

史 海 指 鍼 第三

浦 井 恒 堂

以上専ら希臘の政治歴史に就きて述たるが猶一言附加すべきことあり他を厳密に評すれば眞の

希臘歴史は未だ嘗てあらず又蓋し有り得べのふさること是なり何と云れば希臘といへる名稱は獨り希臘半島及び附近の島嶼を名稱するに止まらず小亞細亞より西歐羅巴の端に至るまでを總稱にして所謂希臘人の在る所は即ち希臘を以て一定のナシヨナリチを形成せず希臘國語の通する所希臘思想の行はるゝ所皆希臘なりを以てあり是故に如何なる希臘歴史を讀むも他に希臘の文明史と相待つにあらざれば眞の古代希臘の面目を窺ふを得ざるに至るべし乃ち希臘政治史と併せ見るべき書は左の數種あり

a. Mahaffy: A history of Greek Literature. 2v ols London 1888

マンハハイ氏は瑞西國ゼネバ湖畔ある小村に生まれ獨逸に於て教育を受け後愛蘭ダブリン府トリニチイカレツジに轉じ卒業後一八七一年以來同校古代史教授に擧げられ一八八六年のD. D. の學位を得現に同校に在り希臘に關する著書論文多き内に前記の著最も著はる此書は主として初學者のため希臘クラシックスの概要を述べたる者なるを以て記事簡明繁簡宜しきを得最も余輩に適切なる者あり此書上下二卷より成り上卷に於て韻文を論し下卷に於て散文を述べ完全なる索引もあり價も比較的廉にして四弗(米國翻刻)とす此書は他希臘文學に關しては William Muir (+ 1860) 氏の大著述を Critical History of the Languages and Literature of Ancient Greece. 5 Vols. の如きありれども今述はず

b. Winckelmann, J.: History of the Art of Antiquity. 2 Vols. Boston 1880

ウインケルマン氏は前世紀の中頃に出たる獨逸の批評家又著述家にして蓋し科學的古物學及び古代美術史の開祖あり氏の父は至りて貧窮ある靴匠にして氏は到底満足なる教育を受くるの望なかりしかども氏の篤學は大に知人を感動せしめ其補助に因りて柏林高等學校に入學し後ハルンに轉學せしか其際兒輩を集めて教授し以て學資を補へり後ゼーハウゼン小學に職を奉じ間も無くドレスデン府なるビュンナウ伯の文庫管理者に備はれ爲めにハルン大學以來の目的なりし美術及び古物學を研究するを得たり一七五四年羅馬舊教に改宗し法王の使臣アルセント氏に勸告に因り羅馬に赴きて法王に仕へ實地に就き古代美術を研究し一七六四年 Geschichte der Kunst des Altertums を公にせり前記の書は此書の英譯にして普通の場合に反し此譯書の挿圖は却て原版に優ること數等ありとす勿論氏の原著は約百五十年前の出版に係れるを以て其後種々の新著出さるにあらざれとも余輩は未だ多く之に優れるものを見ず氏常に曰く

Seek not to detect deficiencies and imperfections until you have learned to recognise and discover beauties.

亦以て一般學者の箴言となすべし此書價九弗にして稍高價なれば猶單簡なる者と望まば同しく獨人 Reber の著の英譯 History of Ancient Arts. N. Y. 1882 を代用すべし價二弗五十錢

c. Fustel de Coulanges: La cite antique

クローランシユ氏は佛國の歴史家にして久しくストラズブルグ大學教授たりしが後巴里師範學校長に轉せり此書は一八六四年の出版にして英譯は題して The Ancient City と云ふ一八七四年出版せらる價二弗此書題してエンシエント、シツタイといふと主として希臘羅馬の宗教法律及び制度を

論せる者にして此種の著書中に於て最も簡にして要を得古代史研究者座右の珍とすべき者こそす  
以上の他前記マフハフヒイ氏の著に *Social Life in Greece from Homer to Alexander* 及び *Rambles in Greece* の二書あり共に著者が多年希臘にありて實地研究を行ひし結果にして頗る有名なる書あり氏は又近來 *Stories of Alexander's Empire* を著はしたるかは *Stories of Nations* 叢書の内に收めたり

以上希臘の部を概論せるを以て次に羅馬の部を論ぜむこと而して此時代に於ては復たヘロドタス若くはスキヂデスと比肩するに足る程は大歴史家を見ず單に二三を除けば或は摘要に止まり或は僅に一時代一事蹟を記するに止まるのみならず其多くは科學的著述にあらずされど先づ第一に指を屈すべきはリビユスの歴史ありと此人は大歴史家といはむよりも寧ろ不世出の講談師といふべく其歴史の信憑するに足るや否は暫く措き兎に角絶世の才筆にして古今の歴史文學中多く其比を見ず苟くも指を羅馬史に染むる者は是非とも一讀すべき義務あり此人は紀元前五十九年以太利のバタビユム即ち現今のパヂユア府に生まれ頗る長壽を保ち紀元十七年同所に歿す即ち羅馬文學の黄金時代アウガスタス、エージに屬し文壇の一方に屹立しき彼の名聲噴々たりしかはある西班牙人は單にリビユスの聲咳に接せむかため遙くに羅馬に來りしといふされは羅馬は兼て自國人を以て史學界に於てヘロドタス若くはスキヂデスと同等の位置を占めしめむことを熱望せしを以てリビユスを得て喜禁する能はず常にリビユスを以て羅馬のヘロドタスと稱せりといへりリビユスの歴史は羅馬建設より始まり紀元九年ヅル上サスの死に終り全部百四十二卷の大著述なりされ

と惜い哉七世紀頃に於て散佚して其百七卷を失ひ今日に傳はれるは僅に其四分の一に過ぎず即ち首卷より十卷までと廿一卷より四十五卷までとす

リビユスの歴史は信憑すへき史料に據り編纂せるにもあらず又精銳ある批評的眼光若くは高尚ある哲學的思想を有するにもおらざるを以て深遠なる理想或は不朽の金言を發見するを得せど雖も一讀人をして卷々措くに忍びさかむる者あり他なし其文章勇健艶麗愛國熱情溢るる如く太古より帝政時代に至るまで首尾照應一前後聯絡一以て天下の一大偉觀を吾人に紹介すればかりマコーレイ氏は氏の歴史と題する論文中に於てリビユスヲ評して曰く

*The painting of the narrative is beyond description vivid and graceful. The abundance of interesting sentiments and splendid imagery in the speeches is almost miraculous.*

とすれば余輩は喋々を待たずして其文如何を想ふに足るべし此書は恰もバールが詩界に於てエニヤスのラチユームに上陸せし以來羅馬の消息を後世に傳ふると同じく上はエニヤス及びロシユラスの業より下はオーガス帝に至るまで歴史の偉業を吾人に傳ふる一部は散文的敘事詩といふべき者とす

輓近史學社會に於て盛に科學的研究行はるゝに至りしとリビユスの歴史は他の多の歴史と同く嚴密なる科學的檢査を受け其結果としてリビユスの誤謬は續々發見せられ殆んど歴史の價値なしとの宣告を受くるに至れりされど元來リビユスは決してヘロドタス若くはスキヂデスの如くに立派ある歴史を編纂せむとの考を有せるにあらずして要するに讀んで面白き通俗的歴史を書かむ



考に過ぎざりしを以て其書方は全く非科學的にして史料の撰擇取捨等の邊に就きては毫も頓着せず前後撞着の記事あり時代の顛倒せるも尠くらず蓋し彼は數多の傳説の内其最も趣味に富める者を選びて全く他を捨て去りて顧みず毫も彼此比較して眞僞を決定せしとはせず眼前に在る好史料と雖も採用せざりしか如し後人の研究に依れば彼は Laws of the Kings 又は Commentaries of Servius Tullius の如き文書は勿論極めて有名なる Licinian Bogaion の一篇すらも讀まざりしが如しといふ此等の大切なる命令條約又は議會の決議等の今日に傳はれる者に以てリビユスの知らざる理由あるへうふを而して彼が之を顧みざるは却て彼の無邪氣を證明するに足るされば之を一の歴史としては價値なきにもせよ余輩は此書を讀み彼の妙文に駈られ彼の能辨に感し一讀卷を措くに忍びず復た事の眞僞如何を問ふれ念を失はずんばあらず一部の好史詩として讀みて可なり是れ余輩が羅馬の歴史を述ぶる始めに彼を紹介せし所以なりとす

以上のリビユスと絶對的反對の歴史家を羅馬歸化の希臘人 Polybios と云す此人は紀元前二〇四年を以てペロポネサスなるアルカデア州メガローポリスに生れたり父をリコルタスといふ希臘あるアキアン同盟の首領と仰かれし故にポリビユスは幼時より父により政治法律兵學などを授けられ頗る通曉せる所ありきといふ百六十八年羅馬人のマセドニアを滅すやアキアン同盟は空しく傍觀者の位置に立ち羅馬の爲めに援兵を出さざりしかば羅馬人は深く之を不快とし千人の希臘貴族を羅馬に招喚して詰責する所あらむとせりポリビユスも亦た其一人にして羅馬に赴きしが羅馬政府は豫期は如く詰問を行はず直に此等れ貴族を拘留して歸るを許さず質として以太利に留むること

とに決し之をエトルリヤ地方に分配せり如此してポリビユスは罪なくして配所の月に咏するまゝとなりしが其際彼は羅馬の將エミリユス、パウルス及び其子プービユス、シ、ピオ家に養はれたる次子あごと友誼を結びしがば特に優遇を受けて羅馬府に赴きパウルスの家に客たりシ、ピオ時に齡十八深くポリビユスに親昵しポリビユスも亦た深く彼を愛し其遠征に出づる毎に之と同行するを常としシ、ピオはパウルの學識と經驗とに因り利益を得しむと少きかゝらず益す彼を尊敬するに至りポリビユスも亦たシ、ピオの厚意を以て多の公文書を購するの便を得後年の修史事業に大なる便宜を得たりきとぞ此人以太利に留まること十有七年百五十一年に至り希臘の質放還さるゝに及び彼も一度本國に歸りしか間も無くシ、ピオと共に阿弗利加遠征に赴き一四六年カルセーシの没落を目撃せり其後直にアキアン同盟と羅馬との間に開戦とありしを聞き急き本國に馳せ戻りし時コリンス市は既に陥り大勢既に定まりて如何とすへかかず乃ち彼の全力を以て羅馬人の間に奔走周旋し出來得る限り平和條件を輕減せんことを謀り其効鮮かゞざりしうば國人深く彼を徳とし彼の古郷なるメガローポリス其他に於て彼れ肖像を建設し以て感謝の意を表せり蓋しポリビユスか多年蒐集したる材料に憑據して歴史編纂の業に着手せしは此頃の事なからむといふ彼は甚だ長壽を保ち八十二歳を以て百二十二年に死したれば此修史のためには充分の歲月を費とを得たりしや疑あり

此人は歴史は全部四十卷より成り紀元前二百二十年より筆を起して百四十六年コリンスの没落に終る七十有餘年間の歴史にして第二ビユニツク戦争及び第三ビユニツク戦争は其重なる記事なり

此戦は實に羅馬の命運に關する所萬國歴史の一大轉機に屬す是時に當りて一大歴史家ありて之を記す事詳に誠に大切なる史料なりとを蓋し此書は分ちて二とあり其前半は第二ビュニツク戦争に始まり一六八年のマセドン降服に終り此僅々五十三年の短時日に於て如何なる理由ありて天下の大半の羅馬領とありしやを説明せむと試み初二卷に於ては其序論としてゴール人ハ羅馬侵入より第二ビュニツク戦争の始に至るまでの羅馬史の概要を述べ後半は一六八年に始まり一四六年希臘の滅亡に至る是は前半部の追加として見るべく第三十九卷に至る最尾の卷なる第四十卷は全部の目錄索引なり然れども今日に傳はるは僅々五卷に過ぎず實に惜むべしとす

此人はリビュヌスとは正反對にして最も熱心に希臘羅馬の社會的・政治的・法律的制度を研究し最も力を史料の蒐集と撰擇とに盡し以て正確なる歴史を編むことを勉めたりき彼は政治家・兵法家なりしのみならず哲學者たるの資格を具へ最もスキデデスに類せり又スキデデスと同じく彼の歴史の大半は實歴の史譚にして十數年の久しき以太利に在りて充分其制度・風俗に通曉しかセルージ没落の如き其目撃せる所なるを以て其記事の最も確實なるは言を待たず此點に於て彼カリビュヌスの正反對あると同じく其文章も亦リビュヌスの正反對にして彼は毫も讀者を樂ましめむとはせずして單に讀者に教へむとし其文乾燥無味一讀々者の厭惡を招くを免れず彼は全著の後世に傳はらざるも蓋し多少此等の點關りて力あるべし試に羅馬とカルセージとの交際危機に逼りカルセージ議會に於て異論紛出するの邊ポリビュヌスに就き讀たる後更にリビュヌスの記事を讀まば恰も幽谷を出て喬木に遷りたるの感あり此二者の徑庭霄壤も當をさざるに驚りざるを得ずマコーレー氏評して曰

*politians and Arian have given us authentic accounts of facts; and here their merit ends. They were not men of comprehensive minds; they had not the art of telling a story in an intelligent manner.*

されは余輩は一般讀者に向ひ此書を讀まむことを勸告するにあらずたかりビュヌスを讀まむ者は必ずポリビュヌスの名を記憶せむことを要すポリビュヌスの英譯はポーン古典文庫に收めたりハムブルト氏の譯上下二冊各冊三シルリング半とす

### 佛國大戲曲家 コルネーユの傳

宮 本 潮 來

佛王路易十三世の相カルデナル、リッセルイヨは其代の英雄なり、奧太利帝國の尊大あるも李氏は威を以て之に臨めば乍も畏縮し、新教徒の執拗なるも李氏の兵を蒙りて立所に塵殺せられ、貴族の跋扈跳梁なるも李氏の勢を以て之を抑ゆれば乍も屏息して又出頭の地なし、是時に當り李氏の地位は欲する所として成らざるは無ありき、彼得大帝曾て佛國に遊び李氏は像を撫し嘆じて曰く、「卿にして我と與に在らば給するに領國の半を以てせん」と、此一言能く人をして李氏ハ人とかかりを想見せしむるに足るあり、然るに此かゝる一世の英姿を抱き身は鼎輔の尊を挾みながら、百方力を盡して之を排斥せしも遂に一の文人コルネーユの戯曲シーゾの名聲を毀損する能はざるは、豈 *Penses are mightier than sword* シゾの地歩を高めしものなるか、去るにてもコルネーユの才藻の程こそ驚かれぬる

ビエール、コルネーユは一千六百六年六月六日を以てルアン市に生る、父をビエールと云ふ、ノルマンデーのダーブルド、マルブル(古代法術の名)、は狀師にしてルアン、ヴィコンテ(ヴィコンテの領地)は水林管理官たり母をマルト、レプザンと云ふ或る會計検査官の女なり、コルネーユ家の通稱は代々ビエールと云ふ、故に詩人コルネーユも家名を繼ぎてビエールと稱せりコルネーユは幼にして小ターロンス村に生長し、猶太の教校に入りて業を受け筆叢と次ぎて法學を學び業成りて代言に従事し、ルアンの代言會長兼海事<sup>アマシロウテ</sup>訟庭の狀師たり、コルネーユの學校に在るや其研精遠く衆に超て嶄然頭角を露はし懸賞を得し事數次なり、殊に修辭學の懸賞あるは當りフ、サールの一節を佛蘭西詩に譯せし如きは、大に人の視聽を聳動し優等賞を得られたるは後年文壇に驅逐して其名を千載に炳耀せむるに至れる本とは知られける、コルネーユは身を法學界に委ねしも其成功の思はしうざる所よりして、遂に其業を捨て更に鉛筆を執りて文學界に現出し、其初陣の聲としてメリートと名づくる戯曲を公にせり、時に一千六百二十九年歳二十三の時なり、フォントネルは言に據れば(コルネーユの姪にして有名の文學者)或る時一少年コルネーユを拉して會て其親愛せる少女の許に至り之を紹介せしに、其後少女のコルネーユに對する親愛は情前の少年に比して大に密を加へたり、此かる事情こそコルネーユをして嬉劇メリートを著作するに至らしめし原因とはなりたるあれど、メリートの出づるや佛國の文學界に俄に新光輝を放ち爲めに大に名聲を博するに至れり、唯其劇中事實を多く錯綜せしめざるければ當時の批評家は一思構簡にて文牒朴素なりと評し合へり、然しコルネーユは文は朴茂にして邊幅を修めざるし所、反て其獨

得の長所にして容易に企及すべからざる所とす

メリートを公にしてより後コルネーユは文壇に雄視する事四十五年、其間著す所の戯曲卅三篇の多きに上り其他文學に關せる著譯書數種あり、今年序を逐ひ戯曲の名を左に示すものは、古氏を追跡せんとするものに便せざるあり

Mélite, comédie.

(1629)

Olivandre, trag.

(1632)

La Venue, com.

(1634)

La Galerie du Palais, com.

(1634)

La Suivante, com.

(1634)

La place Royale, com.

(1635)

Médie, trag.

(1635)

L' Illusion, com.

(1636)

Le Cid, trag.

(1636)

Horace, trag.

(1639)

Cinna, ou La blenneced Auguste trag.

(1639)

Polyenote, trag.

(1640)

Pompe, trag.

(1641)

Le Manteur, com.

(1642)

- La Suite de Menteur, com. (1643)
- Theodore, Vierge et Martyre, trag. (1643)
- Rodogune, trag. (1644)
- Heracles, trag. (1648)
- Andromide, trag. (1650)
- Don Sanche d' Aragon, comedie heroique. (1650)
- nicomede, trag. (1650)
- Perdante roides Lombards, trag. (1653)
- Oedipe, trag. (1659)
- Le Conquete dela Zoisonor, trag. (1659)
- Sextorius, trag. (1662)
- Sophonisbe, trag. (1663)
- Othon, trag. (1664)
- Agésilas, trag. (1666)
- Attila, roi des Huns, trag. (1667)
- Tite et Berenice, com. heroique (1670)
- Psyché, trag. Ballad (1671)
- Pulchérie, com. heroique, (1672)

Surená, trag. (1674)

コルネーユのメリートを出すや自からも其文体の飾り無さを承知し、自ら曰へり「余に取りては一の特段に不利益ある事あり、何とされは余の文体は簡樸にして卑近なるゆゑ人之を見、余は樸素を以て陋卑なりとなさん」蓋し當時文學社會の有様として韻事に用ゆる言語は一種異様れもれにして、實際生活上に用ゆる言語とは眞に異なりとの感慨は其腦漿中に浸染し得たるに依りてなり何ぞ圖らんや是れ自家眼孔の豆大あるに座とるを、メリートの文体は先づ當時れ嗜好とは背馳せしにせよ、其脚色に至りては遙に時流に超つる事萬々なるを見るなり、今其大体を指示せんにメリートの情夫をエラストと云ふ、或日エラストは其友人チルシスに己れの情婦メリートを紹介せしに、其後チ、メ兩人の情交の密なるを見て乍ち嫉妬の念を起し、チルシスの妹クロリスの許嫁なるフェランドルへメリートよりの艶書の如く見せ掛け書状を送らしめしに、フェランドルはエラストれ工みに浮りされクロリスをメリートに見變へんと決心して、其書状をチルシスに示りたりければ、チルシスは大に失望してリジスの許に退きしに、リジスは詐りメリートにチルシスの死を報じたるにメリートは驚く事一方ならず、追戀の情顔面に著はれたりければ、リジスは其状を見て其死の虚誕あるを告げチルシスに逢はせければ、是に於てチルシスは遂に借老の契をかしけり、然るにクリトンはメリートの顔色青白とありを見てければ、エラストにメリートの死状を報じたり、エラストは追悼遣る方なく殆んど狂せん斗りなり、然るに間も無くしてメリートの姪母よりメリートとチルシスの生存せしを聞きて初めて已に返り、メリートの許に至り己の蠢愚

を詫びクロリスと結婚するに至る而してクロリスはフランドルの餘り輕擧なるを見棄て、之に従ふを欲せざるに至れり

右の如く唯エラストの一の計略より四人の情夫は心情を沸騰しめしを以て、世人は大に其思構の精到なるを稱して、インブログリオ(戯曲に計略の込み入りしと云ふ)と稱せり (未完)

## 橋本左内

文

詩

幕末より維新の際に至る、世は幾多の英雄豪傑を生めり、然れども世は彼等を寵育せずして、繼子視せり、嘗に繼子視せるのみならず、其多くを毒刃に斃れしめぬ、橋本景岳も亦其一人なり、彼は實に忠君愛國の志士にして又活眼達識は偉人ありき、然れども彼や天保五年(1834)の聲を擧げてより安政六年(1829)斷頭場裡の露と化するに至る迄、生を享くること廿六年、而も且天下の大事に奔走せるは僅に其最後數年に過ぎず、之を如何んぞ能く其大希望と大抱負とを成功し得べき、吾人は即ち景岳の事業を見ると能はずして、景岳の理想と見るのみ、景岳の風貌に接すると能はずして、唯景岳の幻影を想見するのみ。

時勢の兒、時勢の兒、此語は多くの英雄豪傑の傳記の頁に於て見る所あり、蓋し彼等は潮流に從ふて波を揚ぐるの徒に非らずして、逆滿に潮流に掉し又は潮流を利用するの人なり、此意に於て吾人は景岳に許すに時勢の兒たるを以てす、嗚呼果して彼は如何なる事を爲したる。

北は白山より南は木芽の險に至る、其封七十五萬石之れ徳川家康は長庶子結城秀康の治城せし所

とす、秀康は一世に勇將威名諸侯を壓し、且此大封を領す、殘忍嫉妬の覇府はいうでか之の隆々たる勢を忌まさらん、秀康の死せるは其毒殺によると傳へらる、其子忠直亦勇猛父に劣らざりしが、其暴行は覇府は利とする所となりて、封土は半はに削られ身は遠島に流されぬ、是れより以來福井の藩域上に賢明の主かく、下に勇將猛士乃至碩學大儒と稱すべきものを聞かず、山河落實の感を懷きしこと二百有餘年茲に稍偉大なる橋本景岳を出せり、

景岳通稱左内字は伯綱藜園と號す、景岳とは曾て宋の忠臣岳飛の人と爲りを慕ふて自ら號せる所なり、天保五年三月十一日を以て福井の城下常盤街に生る、家醫を以て業となす父長綱寛厚にして而も氣慨あり、又蘭學にも精通し遙に彼等漢法醫と其流を異にせり、母は僧某の女極めて賢徳あり、其子を教ふるや規律を以て一寛器宜しきを失はず、一は能く其家政を整理一は能く其子を教訓し、令譽高く聞へり、左内の剛毅なる氣象至誠なる精神は、實に此家庭の涵養に負ふ所少しとなさるなり。

左内年七歳初めて封建時代に於ける普通教育の科程に就けり、朝には出で、經書の素讀を受け暮には入りて千字文を試寫せしのみ、然れとも彼の警敏にして好學ある、夙に嶄然として頭角を現はし、彼等群童の捕虫闘犬の嬉戯に耽くる間に、獨り書齋に兀坐して苦學精勵に餘念なく、未だ曾て手卷を釋のさりし。

當時福井藩に於ける學風は、藩儒吉田東篁を中心として稍褊狹なる山崎流朱子學を奉せり、東篁身本下賤なりしが、性甚た學を好み、遂に拔擢せられて藩主慶永の師傳となるに至れり、彼れは

博學の鴻儒に非らず、然れども深く徑世の學に長じ、大に忠愛の道を説きて、以て殉公の大精神を鼓吹せり、左内十三歳に頃即ち就て學ぶ、同門生矢島某當時左内の消息を記して曰く、余與橋伯綱、從東臺田翁游焉、翁門下、多雄辨倜儻之士、相聚抵掌、與譚當世之事、座中或有感憤激昂投袂起舞者、蓋慨學問事業殊其効、而不適於世務也、伯綱時歲方五十六、丰骨珊珊然一書生也、俯首歛膝、含蓄不敢發一言、と蓋し彼は放言壯語徒らに快を一時に取るの慷慨者流に非ざらり也。

彼の偉大の人物たるふとを想見するものは、又彼の相貌の如何に奇異魁梧にして鬼をも欺くの壯夫たりしを想像せんとんは非らず、何ぞ圖らん、彼は白哲纖研、眇然として婦女子の如かりしとは、且つ其人と交るや、温粹謙和深く年少氣鋭れ鋒芒を藏めて、未だ曾て人と争はず、言語進退一に老成の風ありしと、而して其内に蓄積せる沈毅膽略に至りては能く古英雄に比肩して恥つる所なし、吾人は其の著啓發録に於て之を見る。

啓發録は彼が胸中に燃え立ちし活火の返照なり、彼が脳裡に湧き返りし熱血の泡沫あり、彼は之に於て其憤慨を漏らし、其大志を顯はせり、説く所忠孝節義の言に非ざるは全く、匂々肺腑より出で、至誠真摯の氣懦夫をして決然興起せしむるに足るものあり、嗚呼誰れか僅に拾四歳の乳臭兒にして既にうゝる大精神を把持したるに驚嘆せざるものあらんや。

左内夙に天下の志を抱けり、然れども封建ある壓制者は、千里の駿馬をして空しく槽楯に復し、其驥足を伸ぶると能はざらん、彼れ即ち啓發録の末尾に記して曰く、「余嚴父の教を受け常に書

史に涉り候處性貞疎直にして柔慢ある故遂に進學の期なき様に存し毎夜臥衾の中にて涕〇にむせび何ぞして父母の名を顯はし行々君れ御用にも相立祖先の遺烈を世に耀し度と存居候折柄遂々吾身に解得致し候事とも有之候様覺申すに付聊書記し後日の遺忘に備ふ敢て人に示す處にあらず嗚呼如何せん吾身刀圭の家に生れ賤技に局々として吾初年の志を遂る事を不得と然れども所業は此に在りても所志は彼に在り候へば後世吾心を知り吾志を憐み吾道を信する者あらん歎」と、うくて彼れは將來刀圭家たるの運命を以て、父を佐けて醫藥の間に從へり。

嘉永二年彼歳十六自ら慨然として、身僻郷に學び、未だ坎蛙の見を免れざるを歎じ、蹶起笈を負ひて、大坂に遊び、緒方洪庵に從ふて西洋醫術を學び、兼て蘭學を修む、居ること二秋父の疾を聞き國に歸り、五年父没するに及び、即ち後を襲きて醫員に列せり、彼時に年僅かに十八ありき、然れども其舉止の沉着なるを、人に接するに親切あるとは、痛く病者の同情を得たり、當時彼の診断を受けたる父老は吾人に語りて曰く、余は唯彼の手に死せんことを希へりと、彼は實に刀圭家として名聲を揚げぬ、然れども是れ彼に取りては技餘のみ、更に彼は其手を以て天下れ爲に藥匙を揮ふの責を有するあり。

龍は雲を得て靈なるを得雲は龍に依て其用を致す、雲龍の會これ常に望まざる、所にして、而るも千歳稀に見る所なり、左内の藩主春嶽に於ける實に此千歳稀有の奇遇にして、若し左内にして此公に會はざりせば、空しく豪骨を抱きて刀圭の間に埋没せしや未だ知る可きざりあり、當時泰平日久しく、上下恬愉に甘んじ、封建の花と云ふべき武士も、既に墮落の極に達し、苟く



も心を國政外寇に注ぐものありなし、殊に三百の華胄に至りては、深宮に生れ婦女子の纖手に掬せられ、便嬖前に侍し美人堂に充つ、事とする所は酒池肉林に樂のみ、未だ曾て民庶の疾苦を問ひ、其祖先の功勞を想ふものあらず、春嶽公英明此間に絶し其雅量と其活眼とは三百の諸候中之に比すべきもの只薩摩公の如きあるのみ。

公將軍の支宗田安家に生れ、天保九年將軍家慶れ命を以て、越前守松平齊善の嗣子となり、入りて越前三十二萬石の大封を襲げり、公時年猶少かり、其も深く上下の奢侈に流るるを患ひ、令を下して家臣の衣服宴會贈遺に係るの制を定め、又外交は日に多難あるを憂ひ、或は大砲を鑄造し銃隊を編成し、或は躬自ら用度を節して國防の費に充て、又屢々書を幕府に獻して意見を開陳する所あり、是に於て公の名望隆々として高く列藩の間に重きを爲すに至れり。

公殊に士臣を愛し、自ら其尊さを避けて之に師事し、吉田東堂の如きは卑賤の番人に過ぎざりしが抜んで、士班に別せり、又横井小楠の名を聞き、禮を厚くして之に下り、呼ぶに先生を以てせり、鈴木主税も、公の知遇を受けて拔擢せられたる一士あり、曾て疾あり左内之を診す、主税其才を愛し、一日之を公に薦めて左内を延見せしむ、公甚だ其見識の非凡を喜び、直に醫籍を脱し親衛隊に拔擢して江戸游學を命じしめ、是れ實に左内が公生涯の曙光を放ちし一轉あり。

是に於て左内深く公の殊遇に感激し、憤發命を奉りて江戸に至り、蘭醫杉田成郷門に入りぬ、時に安政元年二月あり、成郷洋書一部を與へ習讀せしむ、彼れ日夜研究致々として怠らず、僅の一月を以て業を卒べり、成郷其才敏に驚き、試に書中の事を以て之を問へば、辨論流るるが如

く、一の誤謬あるなし、乃ち嘆して曰く、能く我業を繼ぐ者は、必ず此人なりと、彼が敏英察す可きなり。

春岳公此時に當り、益々一藩の改革を計り、安政二年新に明道館と稱する學校を起し、諸士の子弟をして之に入らしめ、翌年醫員に諭して蘭法を兼修せしめ、又翌年明道館内に更に洋書習學所を置き、文武の道を講習せしめ、左内を擧げて幹事とさせり、彼れ此時僅に弱冠の白面兒、以て蒼頭の教官を率ゆ、彼いかで彼等の疾怨を受けざらんや、然れども彼は銳意革新の實を奏して、君恩に報するを知るのみ、即ち彼は當時藩學の空理に拘はり、實用に適せざるを憂ひ、其面目を一新せんと欲し、洋學所に於ては兵法物産數學等の學科を講し、武藝所に於ては劍槍柔砲の諸術を教へ、一方に於ては文弱武骨の弊を匡し、他方に於ては實用を主とするの方針を執りて、校政を督し宿弊を除くんとを務めり、是に於てり學風頓に革り闊藩翁然として教化に向へり、

(未完)

水濁無由濯我纓 行吟澤畔歎斯生  
從今脫却人間事 寶劍買牛自在耕

前原一誠

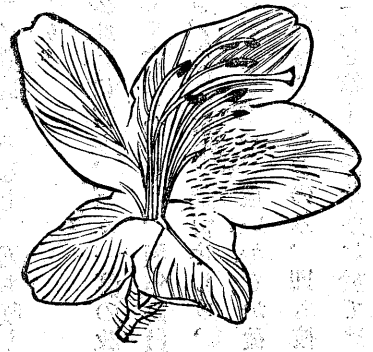
雜 錄

觀躑躅而有感

教授 市 村 塘

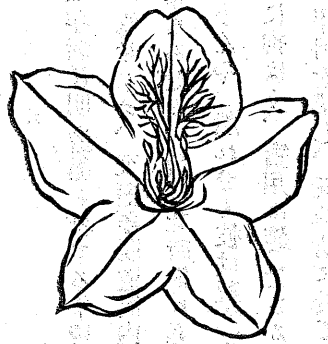
同僚野田貞君金澤彦三町に寓居す、其庭夙に躑躅園を以て名あり、本年五月八日予伴ひ躑躅滿開の報に接し乃ち欣喜往き觀る、見渡す限り紅白黃紫參差璀璨として滿庭苑も模様毛氈を擴展せるが如し、予恍惚賞歎是を久ふすると數時、株數は應て卅内外に過ぎざれども、能く躑躅の高矮華色に配合に注意せるを以て、頗る觀者の目を樂せしむるに足るあり、予試みに稍々花の形色を異にせるもこれを摘集したるに殆ば十五種を得たり、就中判然別物なきを呈とするは圖に示を六種花にして、其他は唯或は花輪の大小、或は雌雄藥花辨の數、或は斑綫色彩の多寡、等に於て多少相違の点あるをのみありき。

何レモ殆々自然大



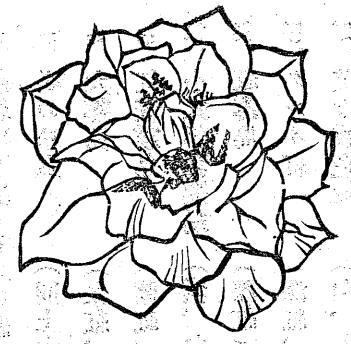
花カツラ

白瓣紫紅斑点  
(上辨丈)



ヤヘゲラ

鮮紅二重瓣



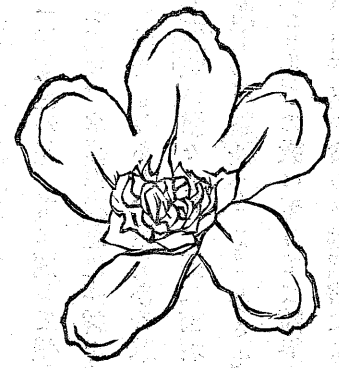
羊躑躅

黄瓣橙黄隆脉  
(上辨丈)



白八重

白瓣中八重青点



紫山牡丹

單紫紅八重瓣



サラサツ、ソ

白瓣紅條入



- 53. 淀川ゲン絞 (薄紫紺絞)
- 55. 三吉野サツキ (白瓣、紫條)
- 57. 小ガラサ (櫻紅色)
- 59. 牡丹紅 (紅、中)
- 61. 百合賽 (白瓣紅條、大)
- 63. カロシマ (白瓣底紅、紫條)
- 65. 鶯色サツキ (中)
- 67. 山躑躅(一種キンノザイ) (細瓣五ノ七出)
- 69. 底紅杜鵑花 (白瓣、底紅)
- 71. 桃色ザイフリ (薄紅細瓣紅葉)
- 73. サラサ(一名音羽) (白瓣紅條、底青絞)
- 75. 三河紫 (紫紅、中)
- 77. 絞山牡丹 (白瓣紅條、中)
- 79. ケンシボリ切咲(白瓣紅絞)
- 81. 銀ノザイ (細瓣薄紅五出)
- 83. 姫霧島 (深紅、小)
- 85. 大椿紫絞 (小)
- 87. 紅梅絞 (半白半紅)
- 89. 雲井 (樺、大)
- 91. 唐サラサ (薄紫紺條)
- 93. 小蝶霧島 (深紅、小)
- 95. 小式部絞 (濃紫)
- 97. 鶯色サツキ (大)
- 99. 銀ノザイ(一種) (薄黃底紅絞)
- 101. 天カ下 (紺紫)
- 103. 紅ノザイ (細瓣五出紅)
- 105. 絞リサイ (白細瓣紅絞)
- 107. 小紅 (深紅)
- 109. 紫山牡丹 (薄紫牡丹條)
- 111. 薄紫キレ咲絞 (薄紫、紅條)
- 113. 白シヨシゴリ (牡丹咲)
- 115. サラサ絞 (白瓣紫絞)
- 117. 初霧島 (深紫)
- 119. 紅小キリシマ(一名橋姫)

- 87. 紅霧島 (三重、中)
- 89. 山鶯 (無葉、深紅)
- 91. 牡丹ツ、シ (緋紅、八重、中)
- 93. 山紫(ムラサキツ、シ)(無葉、中)
- 95. 大牡丹 (朱紅、大)
- 97. 鶯色ツバキ (八重一重一枝紫紅瓣)
- 99. 山牡丹 (緋紅)
- 101. 糸紅切咲絞 (大)
- 103. 梅ヶ枝 (朱紅、小)
- 105. 緋ヂリメン (牡丹咲)
- 107. 小キレシボリ (朱紅、大)
- 109. 花車 (帶樺紅、中)
- 111. 松島勝山 (白瓣紅條)
- 113. サラサ絞(一種蜀紅録) (白瓣紅絞、大)
- 115. 廣島絞 (白瓣黃紅條百合咲)
- 117. 紅紫絞 (紅紫、大)
- 119. 唐草(クレンナヒカラグサ) (朱紅)
- 88. 小紫
- 90. 山薄紫 (無葉)
- 92. 赤ノザイ (緋紅、細切瓣五出)
- 94. 絞牡丹ツ、シ (薄紅絞)
- 96. 小鐘 (白瓣底黃、小)
- 98. 見ナガラ深紫色(中)
- 100. 紅躑躅(ヘニゲラ) (外瓣並内瓣極小)
- 102. ライハ紫 (無葉、大、切咲)
- 104. 伊達錦(一種) (二重、底青絞黃葉)
- 106. 明石 (櫻色紅色、無葉)
- 108. 薄紫ザイフリ (紫細切瓣、五出)
- 110. 紫小車切咲 (紫、小)
- 112. 小櫻 (至小)
- 114. 萬葉霧島(ノ類) (緋紅、大)
- 116. 八重霧島 (八重、朱紅)
- 118. 薩摩紫霧島(ノ類) (紫、中)
- 120. 花カツラ杜鵑(ノ類) (白瓣紅絞)

- 121. ヒトシホ (底紅綾百合咲、大)
- 以上無毒躑躅
- 122. ヤヘゲラ (二重真紅)
- 124. 黄色霧島 (黃瓣底紅綾)
- 126. 白青綾 (白瓣黃青綾)
- 128. 琉球八重綾 (八重、黃紅綾)
- 130. 薄雲仙 (白瓣、紫綾)
- 132. 紫ホソリソ (紫糸瓣五出)
- 134. 黄シヅメ、ホクキン咲 (糸瓣五出縁黃底青綾)
- 136. 紅レンゲ (深朱紅、百合咲)
- 138. 紫萬葉 (紺、八重)
- 140. 綾琉球、八重 (白瓣、底紅綾、大)
- 142. 樺レンゲハ重綾 (外大内小瓣)
- 144. 小ザラサ (薄紅々條)
- 146. 中霧島 (羊躑躅一種) (樺、中)
- 148. 羊躑躅ハ重牡丹 (黃瓣底紅綾)
- 150. 羊躑躅若紅 (底青綾、大)
- 123. 琉球中輪 (白瓣黃條紅綾)
- 125. 羊躑躅一種 (黃瓣青綾)
- 127. 蓮花ツミ、カマレンゲ、サツシ (橙黃百合咲)
- 129. 蓮花ツ、ジ一種 (3ツ、小)
- 131. 極黃ツ、ジ (羊躑躅一種) (黃瓣、青綾)
- 133. 白唐糸、白シベ (白糸瓣、五出)
- 135. 黄丁子咲 (白瓣、黃條、小)
- 137. 銀ノザイ (真紫、糸瓣五出)
- 139. 樺ツ、ジ (樺朱色)
- 141. マ咲レンゲ一種 (羊躑躅一種) (橙黃瓣端紫紅)
- 143. 黄レンゲ異品 (黃瓣、瓣端卷、樺條)
- 145. キツネツ、ジ大輪 (黃瓣、紅綾)
- 147. 東屋 (羊躑躅一種) (黃瓣青條)
- 149. 名月 (白瓣、薄黃條、中)
- 151. 樺綾 (白瓣縁太紅條底青綾)

- 152. 極黄ザイ (黃細辨五出、黃葉)
- 154. 樺霧島 (二重紅)
- 156. ハツレ雪綾 (白辨紫條)
- 158. 白八重 (底黃青綾、中)
- 160. 白紅綾大琉球 (白辨黃條、大)
- 162. 初雪琉球 (白辨底綠黃)
- 164. 牡丹ツ、ジ (白辨底青、極小)
- 166. 赤蓮花 (無葉百合咲、緋紅)
- 168. 白ザイフリ (細切辨五出黃條)
- 153. 樺ノザイ (薄紅、紅條入細辨)
- 166. 樺松島杜鵑一種 (樺、二重、深紅條)
- 157. クルイ獅子又尚京紫 (紫、紺獅)
- 159. カハラケツ、ジ (羊躑躅一種) (楠黃條、大)
- 161. 丁子紫 (深紫極小)
- 163. 牡丹ツ、ジ (白、底青)
- 165. 綾牡丹 (白瓣、底紅綾、八重、中)
- 167. カハツ、ジ (黃瓣紅條底華綾)
- 169. 黄ツ、ジ (黃瓣、中)

以上有毒躑躅

如斯く躑躅の花に紅あり、白あり、黄あり紫あり、或は諸色相混するあり、或は各色濃淡の差度あり、又單辨あり重辨あり、或は單重相雜ゆるあり、何ぞ夫れ變花の多きや、然れども外觀著しく異なるところありて何人も其別種たるを疑はざるものに到つては誠に少數に過ぎざるあり、春期より紅花を開くものは誰も其山躑躅、又紅躑躅、映山紅)たるを知るべく、葉なくして小紅花を開くは誰も其石巖花(霧島)たるを知るべく、夏月紅紫の花を開くは誰も其杜鵑花(索子吉)たるを知るべく、葉大にして黄花を開くは誰も其羊躑躅たるを知るべし、此羊躑躅の有毒なるとは古より人の言傳ふるところにして、植物名實圖考に「近道諸山皆有之、花苗似鹿葱、羊誤食其葉躑躅而

死、故以爲名、不可近視云々の語句あり、以て字義を推知するに足らむも單に躑躅といへば是等幾百變種の總稱に外ならざるあり。

抑も躑躅は植物分類學上石南科に Rhododendron 屬に隸するものにて Rhododendron は躑躅といふよりモ一層其範圍曠大あり、則ち石南の類をも包含す、此屬概して花形整正華輪五出、雄葉二輪、心皮花瓣と對生、五室一子房、内角胎座に多子を留め、蒴は二孔を以て花粉を綻開する特性を具ふるものなれども、人爲淘汰を受くるに隨ひ愈益此標形より隔離變化を來すの止むを得ざるに至るものとなす、

今先づ左に同屬中の諸種を列記し、各種互の特徴を明示し以て學問上の所謂種の數は割合に僅少あるものたるを見んと欲す、

Rhododendron.

1. 葉は大形革質にして常緑あり  
花は淡紅色にして十箇れ雄藥あり

石南 (R. Meternichii, Seels.)

1. 葉革質花淡黄色なり.....女石南 (R. Keiskei, Miqu.)

(1) 葉倒披針形或倒卵圓形  
長さ二寸内外、花八分  
内外の柄と有し總狀花  
序に排列し黄色或は黄  
赤色の花開く

羊躑躅 (R. Sinensis, Sw.)

II. 葉は大形から  
(三寸以内)

2. 葉革質  
なぐさ

(2) 葉倒披針形或倒卵圓形

(I) 萼は葉狀の萼片より成り粘質を分泌し花は白色或は淡紫色

- ((1)) 花淡紫色 紫躑躅 (R. ledifolium, Don)
- ((2)) 花白色 白杜鵑 (R. ledifolium, Don var. leucanthum, Don)

(2) 萼は小形の萼片より成り粘質を分泌せず

- ((1)) 花早春花開る葉深緑色あり 山躑躅 (R. indicum, Sw. var. Kaempferi, Max)
- ((2)) 六月紅紫或は白色花を開る葉深緑色あり 杜鵑花 (R. indicum, Sw. var. muranbanum, Max)

(3) 葉は倒長卵形長さ一寸五分以内、花は五分以内の柄を具し縱形に排列す

- ((1)) 紅花 石巖 (R. indicum, Sw. var. obtusum, Max)
- ((2)) 紫花 紫石巖 (R. indicum, Sw. var. amobnum, Max)



則ち真正の種かるものは唯其數に過ぎずして、杜鵑花は紫躑躅の變種、山躑躅、杜鵑花、石巖、紫石巖はともに *R. indicum*, Sw. の變種と見做すべきものなり、此變種は寧ろ學問上の變種にして他幾百の變花は皆園藝變種 (*Garten varieties*) と稱するを穩當とす

業に生物進化論、自然發生一回論が偏く學者の承認せるところとかりたる今日にありては、是等真正の五種と雖も争う各其發源を異にするに理あらんや、必ずや其祖<sup>○</sup>先<sup>○</sup>的<sup>○</sup>躑<sup>○</sup>躅<sup>○</sup>をかるべからずと雖も、此者果して現今尙生存せる一種なるか、或は全滅して唯變形せる苗裔のみ生存せるの、又人類出現以前に於て己に是等の種類ありしや否や、容易に斷言し能はざる問題に相違かし、乍去少くとも所謂園藝變種なるものは人類出現後栽培誰伐け人為淘汰により、起出せるものなざるべからず、元來生物は親祖の形質を子孫に遺傳するは勿論なれども、亦決して同形質のとなく必ず多少の變異あらざるをなし、蓋し生物は極めて變化し易きものなるに、況して自然界には援精の方法に風媒、虫媒、水媒、又鳥媒等のとありて、可成近縁援精を回避する妙法行はるゝが故に、隨ふて漸く祖先と形質を異にする雜種 (*Biotype*) 變種を生ずるは自然に理なり、されば人為淘汰により數多に園藝變種も産出するは至當にして、毫も怪むに足らざるべし、此場合に於て人類は淘汰者 (*Zueher*) なり、淘汰者の方針により植物各器官の變化を來すものにて、根を食用の爲淘汰すれば根の變形を來し、<sup>大根、葉等、</sup>葉を食用の爲淘汰すれば葉の變形を來し、<sup>花の</sup>花を賞觀け爲淘汰すれば花の變形を來し、<sup>花、葉、果實、</sup>果實を食用の爲淘汰すれば果實の變形を來す、<sup>李、梅、櫻、盆、</sup>梨<sup>の</sup>なり、唯淘汰者の好みに因り同一植物にても尙異局部に變形を見る如き全く淘汰法にあらずし

て何ぞや。

然れども淘汰の結果よく現はるゝには長日月を要するものにて、今日所謂培養植物の多數は何時頃より淘汰し始めたるか不明に屬するもの少なからず、<sup>トカンドル氏の培養法、</sup>躑躅に於て殊に然り、今聊り次に左程長日月を要せずして歴史的分明に淘汰の結果を見たる一二の例を挙げ、以て本論を終らんとす、歐洲に於て天竺牡丹は千八百二年以後實觀の爲め栽培せられ、今や其變種百餘に及べり、<sup>オランダ、</sup>黍菜は十八世紀後期より栽培せらるゝも根を淘汰したるが故に、今も僅の五變種に過ぎず、又ホフマイステル氏は千八百六十三年に於て罌子粟の内方莖柄が心皮 變<sup>ト</sup>たる變物あるを發見し、其種子を採り蒔きたるに其十一%は該變種を生じたり、因て翌六十四年に於て又候其種子を蒔きたるに今度は十七%の變種を生じ、爾來六十五年に廿七%、六十六年に六十九%、終り六十七年に至り九十七%の大多數は該變種のみとされりといふ、又ホフマン氏は千八百七十六年に於て野生の黃胡蘿蔔を採りて注意周到撰擇培養せしに、該植物二三世代の後充分食用に供し得る肉根を生ずるに到れりとなり、現に一旦埋養植物となりたるものも久しく惡地に放棄して顧みざる時は、再び舊の細根黃胡蘿蔔とあるは明亮なる事實なり、是他なし所謂祖先<sup>○</sup>返<sup>○</sup>り (*Reichidung*) をあしたるものにて、艶麗なる美花を開く菊にまれ、牡丹にまれ、椿にまれ、躑躅にまれ、牽牛花にまれ、荒地に放棄して久しく人為加手れなからば、復淡索たる醜花を開くなからずやは、措く世に熱心栽培家と、もに予輩に竊究せんとするところあり。

(了)

「プロバビリティー」の問題

北條 時敬先生 講演  
鈴木 庸生 筆記

左の一篇は本校理學會に於て北條校長の演説せられし者あり、  
「プロバビリティー」と稱する代數の二科は、一つの出來事の未だ起らざるに當り、其れ起り様は難  
易を計算する學科あり、一つの出來事の「プロバビリティー」とは、其出來事の起るべき場合と、起る  
べからざる場合とを、盡したる數をとり、其内起るべき場合の數を、 $b$ とすれば、 $b/a$ ある分數  
を、其出來事の「プロバビリティー」と名づく、故に、若し或る出來事の「プロバビリティー」 $a$ とすれば  
凡ての場合に於て、皆此の出來事れ起るべきを表はし、之を *Certainty* と名づく、又若し之の「ア  
ロバビリティー」零なれば、凡ての場合の内、毫も、此の出來事れ起らざるを意味し、之を名づけ  
て *Impossibility* と云ふ、此の二個の場合は、凡て出來事の起る有様の、兩極端なるを以て、凡て  
れ出來事の發現は、皆此の兩限界の内にあらざるべからず、故に如何ある出來事れ「プロバビリ  
ティー」も、其價は必ず一と零とれ間に横はり、常に正量なふざるべからざるや、明なり、而して、  
其價一に近きに從ひ、其の發現の頻あるを示し、零に近づくに從ひ、其起る事、稀なるを表はす  
ものあり、

次に一問題を解して、其間の奇異なる關係を論せん、  
今爰に甲及び乙なる、二つの箱あり、其内に各黒、白兩種の球を藏す、甲中の白球の數を  $a$  とし

黒球の數を  $b$  とし、又乙中の白球の數を  $a'$  とし、黒球の數を  $b'$  とす、而して一人あり、虚心に此  
の二つの箱の一を取り、其内より一つの球を取り出すに當り、此等の内より白球の出づる事の「ア  
ロバビリティー」を求めんとす、

今二つの箱を虚心に取るには、兩方とも、同様に之を爲すを得べし、故に、其の一つの箱を取る  
「プロバビリティー」は  $\frac{1}{2}$  あり、

又甲の箱の内より、球を取り出す仕方の數は  $a+b$  にして、其内白球の取り出し様は  $a$  だけあり、  
故に白球れ出づる「プロバビリティー」は  $\frac{a}{a+b}$  なり、

而して、一つの箱より、白球の出づる事は、其一つれ箱を取る事と、其内より球を取り出す事との、  
二つの出來事れ、同時に起る事を必要とするが故に、此の「プロバビリティー」は此等の、二つの出  
來事れ「プロバビリティー」の積、即ち  $\frac{1}{2} \cdot \frac{a}{a+b}$  なりとす、

同様に、乙の箱より、白球れ出づる「プロバビリティー」は  $\frac{1}{2} \cdot \frac{a'}{a'+b'}$  なり、  
而して、此れ兩個の箱の内より、白球れ出づることは、甲より出づるも、乙より出づるも、何づ  
れにても、差支なきを以て、白球の出づる「プロバビリティー」は、此の兩者の和

$$\frac{1}{2} \cdot \frac{a}{a+b} + \frac{1}{2} \cdot \frac{a'}{a'+b'} = \frac{1}{2} \left( \frac{a}{a+b} + \frac{a'}{a'+b'} \right) = p.$$

にして假に之を  $p$  と名づく、然らば  $p$  の價は一を越ゆることをあるべし、

爰に於て、之の二つの箱の内にある白球の總數と、黒球の總數とを、相等し者とす、且つ  $p = \frac{1}{2}$

ある量を計算せんとす。

$$a+a^1=b+b^1 \dots \dots \dots (2)$$

$$\frac{1}{p} - \frac{1}{2} = \frac{1}{2} \left( \frac{a}{a+b} + \frac{a^1}{a^1+b^1} \right) - \frac{1}{2}$$

$$= \frac{1}{2} \left( \frac{aa^1+ab^1+aa^1+ba^1-aa^1-bb^1-bb^1-a^1b^1}{(a+b)(a^1+b^1)} \right)$$

$$= \frac{1}{2} \frac{aa^1-bb^1}{(a+b)(a^1+b^1)}$$

今假に此等の二つの箱の内の球を合一、一つの箱に納め、之より一つづゝ取り出だすとすれば、

白球の数は  $a+a^1$  黒球の数は  $b+b^1$

あるを以て、其白球の出づる「プロンビリチー」は

$$\frac{a+a^1}{a+a^1+b+b^1} \text{ あり、而して (2) の式により } \frac{a+a^1}{a+a^1+b+b^1} = \frac{1}{2}$$

故に此の箱よりは、黑白兩種の球、同様に出づることを示す。

然るに  $p > \frac{1}{2}$  ある量は一般に零に等しからず、即ち此等の球を、一つづ箱に納めたる時と、之を甲乙の二つの箱に分ちたる時とに於て、白球の出で様の難易に差あることを示す。

故に此の差

$$\frac{1}{2} \frac{aa^1-bb^1}{(a+b)(a^1+b^1)}$$

が零に等しき時、換言すれば、

$$aa^1-bb^1=0,$$

即ち

$$\frac{a^1}{b^1} = \frac{b}{a}$$

即ち甲箱中の黒、白球の数の比が、乙箱中のもれ、例比に等しき場合に於てのみ、白球と黒球との出で様相等し、

右の事實は普通の考へを以て見れば、少しく奇異に思はるゝもれあり、今一例を擧げて、猶之を明らかにせんとなす、

前問題に於て、

$$a=2, \quad b=4, \quad a=3, \quad b^1=1$$

とすれば、黑白各五つあり、

$$\text{今 } \frac{p-1}{2} = \frac{1}{2} \frac{aa^1-bb^1}{(a+b)(a^1+b^1)} \quad \text{に前の價を置き換ふれば、}$$

$$= \frac{1}{2} \frac{2 \cdot 3 - 4 \cdot 1}{(2+4)(3+1)} = \frac{1}{24}$$

$$p > \frac{1}{2}$$

故に、白球並に黒球は、相等しき總數を有つにも拘はらず、白球は多く出で易く、黒球は之に比して出で難きことを示すなり、

此に由て之を見れば、二種の同數の球を、一つづ箱に入れて引き出だす時の「プロンビリチー」と、

之を兩つの箱に分ちて引き出す時の「プロバビリチー」では、一般に等しかゝるものあり、單に普通の考へを以て、之を考察すれば、其間に、何等れ差異なきが如しと雖ども、事實は大に之と反せり、彼の富園等れ如き者、當り園の數多くして、一見、當りの機會多きが如しと雖ども、籤を引く方法の定め様に依りて、其實然らざることあり、注意を要する場合あふんうと、思惟たるに依り、此の問題を掲げ出せり、

和歌の浦

明 光 漁 郎

余郷に歸る毎に和歌浦に遊ぶ日夕浦上の光景に接すれども性元より風流を解せず文筆に疎なり一言隻句も其風光を贊すること能はず然れども聊舊記を繕き古老に問ひ和歌浦に關する一篇の小歴史を得たり即ち其要を摘て本誌に投ずと云ふ

和歌浦の名稱は起源明かならず後人種々附會の説あれども皆取るに足らず既に玉津島明神の詠といふ

立ちうへりまたもこの世に跡たれん名もおもしろき和歌の浦波

古は若浦の字を用ひたり萬葉集には四首皆若浦とす

萬葉六 若浦爾監滿來者瀨乎無美葦邊乎指天多頭鳴渡 (山邊赤人)

同 七 若浦爾白波立而與風寒暮者山跡之所念

衣袖之眞若之浦之愛子地間無時無吾戀鏗

若乃浦爾袖左倍沾而忘具拾跡妹者不所忘備

編旅作、作者不知

續紀に改弱濱名明光浦とあれば弱濱とも稱へしを神龜元年 聖武帝行幸の際此地れ明媚光麗を賞給ひて明光れ二字に定められあゝの浦と稱せられしあるべし後國風盛に起るや又改めて和歌浦とす其何れの時なるを詳にせずと雖も和歌れ字を以て詠せる者始めて詞花集に見えたれば其比より用ひられしならんか

修理大夫顯季美作の守に侍りける時人々いさなひて右近馬場にまかりてほととぎすまぢ侍りけるに俊子内親王の女房二車まうて來て連歌し歌よみかぞして明はのに歸りけるにかの女房れ車より

みまさうや久米のさら山とおもへどもわか浦とすいふべかりける  
このかへしせよといひければ

贈左大臣

和歌の浦といふにてしりぬ風ふれば波のよきことおもひあかるべし

此地の勝景れ大に世に顯はれしは實に神龜元年に於ける聖武帝の行幸によれり

聖武天皇幸紀伊國甲午至海部郡玉津島頓宮(中略)詔曰

登山望海此間最好不常遠行足以遊覽故改弱濱名明光浦宜置守戸勿令荒穢春秋二時善遣官人奠祭玉津島之神明光浦靈 (續記)

是れ此地の史上に顯はるゝ始なり蓋し是より先久しく此地れ勝風に世に聞えしを以て此の行幸あり

りしなるべし帝の行幸によりて其勝大に天下に紹介せらるゝや一層世人の注意を喚び其後四十二年にして天平神護元年 稱徳帝の行幸を見る

天平神護元年冬十月乙亥到那賀郡鎌垣行宮通夜雨墮丙子天晴進到玉津島下丑御南濱望海樓

二帝行幸ありて名益顯はれ後亦四十年にして桓武帝の行幸あり

延暦十三年冬十月壬子幸紀伊國玉津島癸丑上御船遊覽(中略)甲寅自雄山道還日根行宮

三帝相繼で行幸ありて其美を賞し給ひしより海南無双の勝景と稱せられ月卿雲客争うて此處に遊び玉をみかき出たる中秋の夜は都を後に浮れいで限なき清光に浴して吟詠たり平家物語に

秋もやう／＼半にあり行けば福原の新都にましくける人々名所は月を見むとて或は源氏の

大將の跡を忍びつゝ須磨より明石の浦傳ひ淡路の迫門を押しわたり繪島が磯の月を見る或は白浦吹上和歌浦住吉難波高砂尾上の月の曙を眺めて歸る人もあり舊都に残る人々は伏見廣澤の月を見る

さては霞む入江の春の明ばのはいはずもわれ芦の葉わけてよる舟の波寐すし夏の夜雪に松原うづもれて汐干にたづの聲寒き冬の朝に至るまで浦上の光景は歌人の錦心をなやまし詞客の繡腸を洗ふされば此地の勝を記し美を詠ずるもの枚擧に遑あらず就中宇治關白頼通大納言公任三卿の記事最も明詳にして當時の形勝を考ふべし

曉に出ていとれもいろある所々見むとて玉津島にまうてむとて(中略)あるは道かほつかあしなといふ程に神んたちたるもれ先につかうまつらむとて出来るなりあひの松原よりゆけ

はまたも草生ひしけり澤に駒のあるもれうらみとりの松こくふき中より白浪のたつも見とほさるやう／＼御社にいたる程入江のほとりに蟻の家のすりにて舟ともつなきあみとほほしかとしたるも都にうわうておかし御社にまうてつきて御てく奉り所々めぐりて見ればいひやうむがたかくおもしろくおのしきを思ふ人に見せぬをたれも／＼もおもふへしそこの有様いは、中々おとりぬへしかゝる所にて中々ものもいはれぬ物にあらありける「かへさにふしの岩屋を見れば佛のいさげにてたはすを

蟻人のれり渡しけむしるじにや窟に跡をどゝめおきけむ  
少將

あまのそむ濱の岩屋の佛には波の花をや折りてますらん  
和かの浦よりかへるにおもしろきさく／＼やおひたるあまを見て少將

年をへて和のの浦なるあまなれと老の波には猶そぬれける  
永承三年頼通公高野山に詣づるの記に

十八日癸未天晴、方棹華船迄干木御川尻、令下給、是行路之便爲御覽吹上濱和歌浦也、已剋之終着御湊口(中略)先御覽吹上濱、朱紫比袖尊卑争行、干時蒼海渺邈晴砂崖鬼如登山山似向蒼嶺、頃之經雜賀松原令向和歌浦給、翠松傾蓋白浪洗蹄、每見風流之飽地勢彌感土宜之稟天然、猶指點吹上之濱和歌之浦雖山邊之詠柿本之詞合此地亦難矣、加之按轡扣鞍争拾色々貝輩已不別老若各任志之及、乘輿之餘殆忘日暮未剋還御御船、

余は此地の形勝を述べざるべし幸に仁井田翁が望海樓遺趾の碑文あり其文雄麗にして浦上の形勝を悉せり即ち此に引用す風流の士好旅の客須らく親のら海南の絶勝を探て可かり

於戲邈哉斯地之爲靈也滄桑之變無窮而互于古今獨擅雄麗絕特之稱者豈非天地淑靈之氣所鍾仙都神區耶(中略)蓋斯地西山巍然挺地屏列西走入海者雜賀崎也東西長嶺穿雲邈迤西沒海者大崎也兩埼之間一大海灣豁焉與敞而和歌浦居其良位古之所謂南濱者蓋其前面而望海樓實在於茲市鄼之名今猶存矣赤人之詠田鶴亦此地也西南所望依稀於雲際如一掃淡畫者阿之諸山也南濱之東數百步至玉津島島東隔海灣魁然一峯臨灣峭立榜無延緣者名草山也山麓白砂如雪左右聯合者名草濱也濱之南端岬巖嶮崢嶸臨海欲墮落者琴浦也島嶼北連曠野西關蘆洲鶴汀縈迴點綴者此古地形之大較也今也一帶長洲起于西山之下壇蔓夷靡橫互南濱之前殆與琴浦相接玉津島前灣與海分界僅通波焉耳於是萬景改觀新勝繼興環瑋殊絕星羅雲布不可端倪者不知造物者之意果如何也若乃窮滄溟於寸眸盡重巒於一顧風帆沙島旁午晨霏夕靄變幻出沒以供四時之賞者是其千載而所不變也宜哉冠於天下之勝而著于古以盛于今也(以下略)

Experience is the true wisdom  
of nations N. B.

文苑

久我庄七傳

紫

影

不知火筑紫の國黒崎に里に、久我庄七と名ひけるは、志いとまめあるをのこにて、二十の年父を失ひてより、もはく兄ある人を助けて、朝か夕な紺搔の業を務めいそしみければ、家道いやましに榮えゆきぬ。みそぢの頃自ら家をなして、やうく豊にあるまゝ、金うす業を營みて、五十路の頃は村ぬちにならびかきまで富める身とありぬ。

されど人に驕り物に吝なる心露だにあく、貧しきを救ひ、乏しきを足らはすこと、屢かりければ、國れ守より七度まで賞詞賜はりて、名字帯刀をさへ許されければ、いよ、喜び勇みて、いかでこのおほん恵に答へまつらむと、所の人々と謀りて、まづ妙見の子瀆三町餘を埋めたて、公の水田となさむと、慶應三年除堤四百間ばかり築きて、新墾の事はじめけるに、くさくさのさわり多くて、黄金數多失ひ、同じ志の人々も漸う離れゆきて、今は唯かのれ一人になりぬ、されど聊かくれたる色だになし。又れ年は秋のみより乏しくて、餓に迫れる民ども道にみちたり。庄七獨うち頷き、かねて儲へ置きたる廩米を取出して、わびしき人々に分ち與へ、そ役して開墾の業をさしめたれば、日を経て事なり整ひぬ。明治五年又も五段海埋立の業を企て、七年ばかりありて、新田二十八町餘を拓きえたり。これにも數の財傾ければ、今は僅にやからを養ふばかり不残りたる。

さるといかなる禍津日のおかびにや、明治十四年九月の頃、はやち風れどろくしく吹き荒み、潮除堤六所までやれ崩れて、あはれ十とせ餘のいたづきも、空しく水底の土となりけり。庄七既



に六十路を越えたるものうら、露ばかりもひるめる色なく、修補の事共おきて認め、次の年また  
くなりいでぬ。うくて明治二十三といふ年、七十あまり一とせにて身まうりければ、子の庄右衛  
門父の志をつぎて、新田を治め、今は族多く家豊に、八東足穂の稻の波黒崎の海についで、永  
くその紀念を留めけるにぞ、公よりも物賜はりてそぐいさを追賞せられける、あはれいみじ  
くありがたき翁にあそ。

落葉

花 廼 舍

立田姫や織かけ、ん時雨やそめいだしけんど人皆のた、なにし四方の梢も朝ささき深くなりゆく  
霜にあらそひうね枯葉がちになりてはにしきやほころびけん色やあえけんともふ人あきがのへ  
りておもしろく梢離る、二葉みはさへあるにやがてひまかく散りみづれたる」初めて絶ゆる道な  
らねば庵の門は木の葉にまかせつ前栽の茂みもちりかひてをりくもりくる月影をどはいかにま  
して更ゆく夜半の嵐に

ねやの戸をうつ音はして照月に

さはらぬ雨は

おち葉なり

けり

遊魂録

紫

水

何となう物悲しき秋の夕べ、そゝる故郷人の忍ばれて、袖の甲もおさまさるに、秋の夜は夜寒を  
わびてか、聲もとがれてをちこちにむせかへる蟲の忍び音は猶一層の哀れを添へ、折ふて天傳ふ  
孤雁の聲は、蘇武の帛書をうくるかとあやまされて、翅ある身のいと羨しく、忍びかねて押あ  
くれげ、断雲を縫ひゆく片破月はおぼつろく下界の闇を照して、夢に入り夢香山さかがす煙  
の如く、そよふく風に打靡く野べの小薄、とりはづては戀しき人の招くかど疑はれ、老松蔭暗  
き所鬼火頻りに燃えて新しき塚さへはの見ゆるに、懐舊の情うたゝ禁下難く、ふさ敷に入りこ  
人ののばれて、思も消ゆるばかりになむ、

今は静りに苔の下に眠る學びの友、思ひ出づれば今を八年の秋半ば、君と一たび學びの庭に相見  
してより、親しくも結び初めたる管鮑の誼、春は手を携へて花鳥の影に吟下、秋は袖を連ねて青  
山の月に嘯き、學びの道の奥深くたどるにつれ、友情日に厚さを加へけるに、あはれ鳥兔足早く  
して、長しと思ひし滿五年の星霜いつう閑し終り、今しも我等同學の友が懽焉として袖を分つ  
べき日は來りぬ、咲き初めし花の木蔭に撮影せし一葉の寫真をのたみにて、をしき袂を分ちしは、  
忘れもやう明治廿九年三月廿六日といふ日ありけり、嗚呼廿六日といへる此日こそ、我終生忘  
られぬ日の一なるべきなれ、我慕はしき師に分れ、我こひしき同學の友に分れ、我愛しき同校の  
朋に分れなほ君と我と再會を金城の學庭に期せしこの日なるを、又我病床に打ふたるも實に  
此日ありしなり、あはれ四山は櫻花ははや山さが笑みにこぼれたりとは、音かふ人の噂に聞き

て、我は唯枕頭の挿花に思ひ比ぶるのみありき、紙障をあぐればさすが庭櫻は咲きたり、されど満山雲を吐くの大觀はもとより望むべくもあらずして、唯落花風香きに散りて人生の無常を告ぐるのみあるに、萬感溢れ來りて又紙障を閉ぢ、せきくる涙を寒衾の袖に包みぬ、  
あくて萬紅いつしか枝を去りて、梅櫻今ややうやく緑と深め、君の名の杉村、たま／＼杜鵑の聲を聞く頃とはありぬ、我病も稍息り、君等はすでに金城に在りて病いゝに問ひこしぬ、思へば此玉章こそなかく／＼に我涙の種ありしう、同窓の友ははやも金城に在りて、盤雪をあつむるものを、孤雁群を離れて我獨り北海の濱に彷徨ふべきか、共に師教に枕して侵露乘星れ酸苦を嘗め、普天率土共に世益を勵まんと契りしものを、今は我獨り北邙の煙とさきだつべきう、斯く思ひ續けては情緒糸の如く亂れて、九腸爲めに分劈するの念ありき、

その後病痾は紙をへぐが如くに怠り、まゝてふ月の清漢に苦口を洗ひ、葉月の月光に惱情を澄ましつれば、病軀いつ／＼舊態に復して、遂に我大君の御代長月の九日といふ日を卜して、一車矢の如く俱利伽羅の峻嶂を躑えて金城の客舎に投下ぬ、あはれさすがに茱萸は取らぬものゝう、あづのう登高の興を遣り、あまさへまのあたり君等が健顔を搦せし我嬉しさはいかなり／＼ぞや、かくて君と我とは諸共に同じ學堂に昇降し、修攻の餘暇には、あるは共に春日山の楓色を賞し、あるは兼六園裡に秋風の辭を誦し、又ある時は孤燈の下に會して世れ趨向を談ずるなど、舊情漸く帰まふんとせしに、思ひかけきや昊天徒々に戯をあして、君が空しく二豎の襲ふ所とあふんとは君初め風れ心地とて打伏しぬ、あはれこれやぐて幽明界を異にするものあふんとは、誰うは思ひ

設くべき、さすがに熱は稍常温をこえたりき、されど尾山病院の醫員は診斷して謂へり、かく熱の高きは此頃流行の感冒のさがなれば、必ず氣にかし給ひと、三日を出ひずして癒ゆべければと、すでにして四五日は過ぎぬ、されど熱度は日に高まるのみなりき、我等が音のなふ折々は、いつも君は學校のこととぞ聞きもし尋ねもしたり、我等は彼此よさまに言ひつく／＼ひつ／＼話し慰めもしたり、これ君がもと氣に勝ち世をうれたむさがありしゆゑ、よしあきことに神經を刺激して病勢の加はふんことを恐れし故ありき、君は又言へり、寸暇だにあふば必ず音づれくれよ、天外の孤客となりては便りなきものとはうねて聞きつれど、いたづきてこそ始めて思ひ知りたれど、嗚呼生平女々しきことは夢にだも口外せざりし君の、のくまでも我等學友を待みし言の葉、いり給ひぬ、暗中に光を得たふん君の喜びはさるものから、母君の驚きはそもいかりけん、掌中の玉どろ／＼づきて、いつの世に榮ある光をも見んものぞ頼みし君の、紅顔色あせて病牀に苦吟するを見ては、生を隔つる心地もした／＼むかし、くすしは、只かゝるべき苦はあふざりにかくなりたれば今はせひもあし、此上は入院して心靜かに治療し給ふ方よろらんと云へば、さうでだに心もとなく思ひなりし母人の、たゞちに此を諾し、風靜かなる夕べをいふみて、遂に尾山病院に入院しぬ、

(つづく)

くろ 髪

文苑

千木花樵人

軒はより立つよど見えし浮雲は雨とあり、翠嵐朝もふに絶間なき此のわたり、魚鐘の里より梟のうまやにいつるには、之れにましたる捷徑あふしとて、行き通ふ商人少なのらすとや、未だ秋れ日の斜にうけを落せど、ますほれ世見は目まはゆし、さらは我もあれより、

右や左や岐路の二條、まよ左せん由有けにを花の招けは、

一刻半をもえ費さずとき、けるものを、道や迷へる。夜は遠近の杜より襲ひきて、霧立ちまよふ廣野原、人まつ虫の我をうとたとりいけは鳴きやみて、草を結へる柔もなく、鈴虫さてはくつわむし、いつれの方に驛あるらん、我今小徑によらさらまうはと思へと己に遅し、嗚呼北斗やいつう、芒かくれ天を仰けは、三日はかりの弓張月獵人れ幸をまれし片うつら、何と見るらん二聲みこる、きりふけければ星かけも見えず、よしや我花の車にぬれけん雅男もあれば、せうしを花の袖りて夜をこめてわく白露のはかなき夢路をたどらん、佇立めは四隣寂莫として虫の遠音近音、を花の穂に風見えて虫のねなきぬひ、きあり、松風の、あふす、せかる、水の音、し、之れをじるへにくさよ、草をのいさくり分けて、おと近くなるまゝに歩とどめてすのし見れば、思きや行水いと清けに岸より岸中々にひろき川のあらんとは、汀は水うれて月にさゝれればは下りて、はしやあると源末みわたせば、霧より出て、霧に在る二帯の碧流、身は冷て心さひ、七瀬は音にそれならぬ聲は絶々に、心耳にひびきけるり、やうく高くありてかもし鐘の音と聽る渡たれど、さてはうれし今は一夜の宿かりなむものこ、いそぎ堤に上り、茫々たるくされ茂みる身を没して、一向かねの音を尋ねて異の方へと分け行きたり、一叢しけき尾花を分けて彼方篋

むらのくれ、一穗の打つゆに映りて、女のうら若けなる讀經の聲さへかすかあり、

いとつきくさ草葉のま垣にしける八重葎誰やこもるらん、折戸かたくとさしたり、わたるのさむもさすのあれば、つとめの終りをまつ手つさひに垣にそひてめぐりつ、茂き木立の下枝をくゝりて伺ふに、黒木殿によそはわれされと卑しうらぬきわにて、み簾半かゝけたり、あるしの影は見えず、

鐘打ち止み人れ立ちたる氣勢、灯は次の間の紙窓をもれたり、今はよりりけりこて、折戸ほどほと、たゝげと音もあ、音へと聲もなきしはし紙燭袖に草分けて人の、門近く歩とめて、誰そいふせき夜の空あやしの草の戸尋ね給ふべき人もあきを、門ちかひにもやあるらんと云ふに、否とよ之れは魚鐘の里より梟の驛へ道をまよひて行きくさし、せんかたあみよるを花かくれに遙に鐘の音さゝて、さては人は坐せりと嬉しくて路をもゑらす、たとり來ける旅の身、あはれ一よのやとり許したまへ、と般さんに請入れぬれば、さかはと計り戸をしひらきてそうし入れたり、傳ひ行く庭石なむる日うけ露氣く、花の錦の千種は見えねと草のくれ、我身ひとつの秋うほにすたく虫の色々、小窓の下に芭蕉葉燻り算の水れ岩たゝく様、ひるは簀の縁に鳥雀や飛ぶふん、いと幽静あり、

かつきたる衣あふれは主れさみは、遠山の眉墨かきかから亂れねとも芙蓉の躑香煙にけふり、あたち品濃かあれど緑の黒髪影もあし、されどもとより法師にあらぬ氣色の人は好みてもあきらぬ尼法師に、何とて身をやつしたる語れ聽かぬ、懺悔は後世のつみ滅と云ふものを、

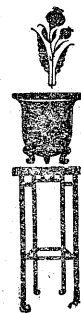
我ゆゑうゝやさしも盛の彼の君を、花の袂をぬきかへて墨染の袖にやつさゝめけん事の悲しさい  
とほしさに、浮世のゆめのさめはてければ、せめて君の同一みちに入りてもかかと観念したる、  
白拍子の身の果とや、

片しく袖の薄くこにはあらねど、主れ尼法師の往生の志深くして、行業不退れ有難さに、夢あり  
のたき手枕、通ふは只萩の上うせ、簀の水れしふきの露を命にさけよとはかり、むせふ虫は音の  
とあはれなり

勅になく灯のもとの小督のち  
即坐さす芭蕉に雨をさく夜哉

何となく冬夜隣を問はれけり

其角



薄紫

松風

曉寒さ露のあと

(二二) 夕顔  
遠かた人を使りにて

君にすゝめし一房れ

花に其身を寄すればり

夕さりくれば物けなく

人目もうれし秋の野

木枯通ふ夢路には

怨みながらのものゝけや

行かるべし愛に正談す

几帳の影に消え行きし

妬のほむら身に受けて

たゞ其儘に絶え果てし

あゝくちをしの契かき

白くも咲きし夕顔の

恨は長き朝あゝ

涙の露にそぼぢつゝ

日影もけたぬ花の色

惜しきは君の匂ひやな

はうなき宿の一夜さに

ありし昔を忍ばする

思ひは今に飽るぬ夕顔

遼東原

霞生

雨雲西に立ち迷ひ

淡き日うけの薄れ行く

遼東原頭秋れくれ

血潮に饑ゆる荒鷺の

胸のほむらを羽に包み

御空のするに互り行く

ふりさけ見れば目も遙に

風蕭々の荒野はふ

廣き眺にゐくれたる

昨日の修羅の夢の跡

今に淋しく止めたる

あゝ啾々の虫の聲

踏めば聲ある枯草に

「、し點 源氏物語句引用  
前號桐壺の篇は高き行を逐次に讀み後低き行を讀み  
文苑

深き思ひを遺したる  
葉末の露の哀れさを

とふ人も無きとつ國に

永く眠れる亡き魂の

天と地とに迷ひ居る

身を赤心にまう一つ、

命を君にさしげしは

あけぼの露に咲く花は

色美はしく馨れども

秋霧に木は實汚ち果てし

怨は風に身を寄せて

冴へたる月も影薄く

流るゝ星も哭くらん

夜半の木枯たけびつゝ

よひくゝ狂ふ妄執の

うつゝの蔭を見る時は

かすけき聲を聞く時は

運動會戦勝者の頌歌 葉舟生

オリンピック野の晴れの場に

たのがタウンの名譽をは

その健脚にふみしめし

勇士の面影見ゆるかな

楯おごそかによろひつゝ

トーナメントに打出し

いと勇ましき武夫の

むろしのさまも見ゆるかな

ホープの炎もやいつゝ

天馬のあめをかけるごと

流星空を飛ぶのごと

走る健兒のけあげさよ

天柱くづるゝ歡聲に

兩腕高くほゝゑみて

オリブの冠さしげにし

勇士の面影見ゆるかな

地軸も折るゝ喝采に

胸に喜悅をおごふして

レヂーのバースびびきたる

その武夫もみゆるかな

ほまれを深くさざまれい

光まはゆきメタルをは

その胸の上のいやりす

勝ちし健兒のいさましき

よしビンダーは歌はずも

よしバイチャスきさざまがも

うちしほまれはとことばに

つくるの時はわらざらむ

(終)

冬日詠十首歌

月前時雨

荒はてゝ月のみ守る關の戸を名乗ててすくる村時雨哉

枯野月

霜うれし草の原ゆくいさゝ川うつるも寒しゆふ月の影

寒草霜

枯はてし草葉残ふすお霜に鳥のあとさへしるき朝哉

谷落葉

峰々の木のはゝ風に流るり細谷川のおともりすりに

花 廼 舍 正義

落葉浮水 散しける紅葉ながりに賤女か手桶にくみし山の井の水  
 港千鳥 故さとのゆめを集めし港ふね泊つとはしらて千鳥鳴覽  
 社頭初雪 朝またき詣し人跡はくりはつ雪ふるし神れひろまへ  
 椎紫 椎しはをよきては雪のふぶねとも常盤の色は隠さり覺  
 歳暮雪 徒に今日と暮れつゝ今更にあつめまほしきまとい雪哉  
 冬祝 白雪のふりつむ軒の梅のはかりくれなくこそ世に薫けれ

學友の一めぐりの忌に

なき人を忍ぶう岡の白菊の高き香りは世に残りつゝ

陵園の妾

とちこむる松れ扉のうたりけやてるにはつうし秋の夜れ月

藤原師賢

君りためつくす誠をいつはりとおたにふきつる日譯の山風

野雪

掃ふべき尾花か袖も枯れ果てぬつもらば積れ野邊の白雪

中村了

香満多友經

美島竹外生

冬季雜詠

茶の花や喜撰法師は冬籠  
 斧どつて石に乾鮭の頭をうつ  
 乾鮭の腹にうち込む霞かお  
 欠落に路教へけり冬の月  
 同じ穴の貉集ふや河豚汁  
 狸すむ三本榎しぐれけり

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

欠落の駕にしぐるゝ京れ道  
 みふるゝや路金乏しき奈良の宿  
 烏籠を椽に干したり枇杷の花  
 風呂を出で椽に爪つむ頭巾哉  
 人れ妻の雪掃て居る小籠のち  
 雪折の梅に達摩を刻むかち  
 茶の花や土黒うして鍛治れ庭  
 草枯れて江れ水浅き朝日かな

紫影

光夢

文花

九愛 花龍

冬川は石間をはしる鮎かき  
 草枯れて虫も焼かるゝ野の火哉  
 時雨るゝや貧乏徳利さげて行く  
 こがふしやはやらぬ神の鈴が鳴る  
 野は朝や溼かき草の上  
 上人の野にいばりする頭巾哉  
 旅僧の脛ふきつくる吹雪かな  
 灯ともして風見る庭の落葉かな  
 橋守や橋錢つなぐ灯のさむき  
 冬川の石にくひつく鳥かな  
 紫影先生に  
 交りは鴉あはれむ千島かな

潮花  
 浦水  
 無哉  
 蒼子  
 無禪  
 笹舟

山不厭高水不厭深周公吐哺天下歸心

曹孟德

皇朝史略摘註序

正史卷帙浩瀚。讀者難於得要領。于是約史之著多出焉。無慮數十家。其尤行于世者。爲山

村上函峯

陽頼氏日本政記。拙齋青山氏皇朝史略。善頼氏主論。治亂盛衰之故。故事不關於此者。往往略焉。青山氏則不然。約上下千有餘年間事蹟。提綱挈領。而間加論說。固非其所主。各有長短。夫約史以呂祖謙大事記。王禕續編。江贊小微通鑒節要。曾先之十八史略。爲藍本。宜主事。不宜主論。如頼氏主論。則是范祖禹唐鑒。孫甫唐史論斷之類。非純于約史者。以體裁論之。或遜青山氏矣。况青山氏嘗與修大日本史。故取舍有據。詳略得宜。又非世之臆斷筆削者可比。然則後進津筏。不得下以青山氏爲長。余承乏教官。數年於此。常爲子弟授是書。而敘事簡。該義廣。子弟或因於制度掌故之細。難解者。余乃檢閱律令格式等書。爲之註釋。名曰皇朝史略摘註。余學問剪劣。雖未免紕謬之責。然後進由。此以通曉是書。則其於逆游正史淵源。亦未必無小補云。

與楮公書

管

穀

月日布衣之儒生菅穀謹再拜上書楮公閣下。敬聞諸人義管城子得其名於天下也。公乃宣言曰。彼管城子何者也。其爲事也無不常依我。而今其名則却在我。吾甚羞之。吾不忍爲之下。吾不復爲之用也。穀聞之。語曰。人不知而不愠。亦不君子乎。故古之人務內而不飾外。取實而不求名。不患不見知。而患所以不見知。是以窮通榮辱不動其心也。顏子在陋巷而不改其樂。大舜得堯之天下而不爲泰也。閣下博覽強記。學兼古今。識涉東西。天下之人無不知之者。上則自王侯貴人。下則至田夫野人。皆相交游矣。至若夫出入臺閣而無驕色。沈淪草野而無怨言。是所以閣下之爲閣下者也。穀故以爲閣下有古君子之風。竊以慕其爲人者久矣。然而今聞此言。穀甚



惑之夫國之所重者人也其人存則其國以存其人亡則其國以亡方今天下之日益進而月益新者是實有閣下與管城子在而警醒天下之耳目而為之先覺也然而今一旦閣下與管城子不相容不各為其用天下之文明頓挫折天下又無寧日且夫世之亂臣賊子其所最恐者其名千載之下為閣下所載而其罪千載之下為管城子所詠也然今有二公生隙焉是將有天下之勢大不可測者也矣二公而一斃乎所謂虎死而龍亦斃者也數甚為天下悲之昔者蘭相如所以避廉頗而不相見者誠有所察於此也以私怨釀天下之禍者數不取之也閣下願察之雖然曩所謂如數之所聞公之言非是有德之言也安謂閣下之賢而有此言乎然是天下之大事也且夫以曾參之賢也而三人疑之其慈母猶且投杼而起踰牆而走是所以數不能無此言也願閣下諒之胃瀆威尊恐惶無已頓首再拜

水喻

黑子軒

溪水猶小人歟。譬乎涌于石層。汨乎流于巖脚者。猶小人之慳惓憤眊。踏險犯阻而不顧也。蜿蜒注壑。逶迤沿澗。而不知其所止者。猶小人之抵冒狼戾。陷于逆流于邪。而不可制也。海水也不然。一碧萬頃。溟濛渺漭。猶君子之亮直醞藉。汪々乎不可測也。鴈鷺泛々。鯨鯢潑々。漁舟浮而商船漾。猶君子之心胸寬裕。而有能容也。若夫怪風慘憤而起。淫雨瀟瀟而下濁流。則恬波變狂瀾。激澗化怒濤。洶然潰然匉匉然。山崩地裂。猶君子處亂世。而狂奔狂馳。口飛沫而說道義。手握汗而醫時弊也。小入也不然。處熙々雍々之世。徒鳴不平。漏鬱憤。奮而狀義。激而遷怒。猶溪水之懸青天而為瀑。灑々乎激嵌巖。擊々劈乎竇穴。夫溪水於海水其差蓋如斯甚矣。雖然均之水也。故掬一滴而沒諸海中。則海水也。注諸溪間即溪水也。其異畢竟依異其地而然也。嗟君子小人之分。猶如此矣。固非有其差也。豈可不深鑑乎哉

錄倉雜興

知足道人

年々六月滯湘濱。我愛此鄉涼味新。江店呼盆魚下物。僧房借榻竹為鄰。袁枚漫詫無官樂。厲鶚初非有力人。避暑逃名心地澗。煙波活蕩海鷗親。

代友人悼亡

一謫人間十八年。江城笛裏醒游仙。粉盞香瘦春如水。玉佩聲殘月墜烟。疇昔定情空有地。者番離恨欲無天。彩鸞祇合瑤池住。暫嫁文郎了夙緣。

賀谷鐵臣翁七十七

會期勳業畫凌煙。京洛樓臺樂老年。古句拈將為君誦。英雄回首即神仙。

法海餘滴 節錄十首

竹

溪

僧一休 咀嚼乾坤儘笑顏。諷險談讖一身閑。心源明似秋空月。真性高於萬疊山。西行法師 踏遍草鞋瘦竹筇。逃來世事淡兼濃。念珠三昧唯知命。一片心高於富峯。熊谷蓮生坊 斬花紅淚暗銷魂。解脫發心歸佛門。昨犯隄風戰袍冷。今迎香雨法衣溫。西塔辨慶 鞭撻縱橫淚点斑。不知語主解愁顏。若教毛氏無賓客。安得詐逃函谷關。

文苑

苑

一 遍上人 竹杖草鞋逃慾海。拜身長謝金鬆鏡。請君不絕讀經聲。須滅成山先祖罪。  
 行基菩薩 粥魚齋鉢淡生涯。一偈三乘清也奇。今世寺僧多好慾。不知誰亦似斯師。  
 傳教大師 善學專心念佛慈。轉迷胸裏似清池。名稱傳教副其實。布教天台是此師。  
 導元禪師 身如稿木節夫高。心似死火氣自豪。悟道轉迷開一派。佛門場裡鎮風濤。  
 親鸞上人 易業道中香靄温。幾千歎喜浴其恩。非僧非俗號愚禿。食肉帶妻一法門。  
 日蓮上人 三衣一鉢淡生涯。七字稱名粘齒牙。不染滔々濁流水。日蓮清似白蓮華。

詣吉祥山永平寺

龍山梅塲

初到祥山地。輕輕雲水躬。巖巒開淨域。殿閣聳長空。祇樹風塵外。禪心佛略中。夕陽長戀賞。緬憶昔年功。

偶成戲參陸放翁句

君峰外史

行遍天涯等斬蓬。詩家於此欲途窮。夜來一笑寒燈下。死去元知萬事空。

送友人某之仙臺兵營

徹巖小史

離歌唱罷上河梁。一語寄君々莫忘。好去秋高馬肥處。宮城々外月如霜。

仙臺古稱宮城野詩中故及

九日

古狂生

異鄉今日又重陽。客裡年々情易愴。不識一叢故園菊。秋風籬落爲誰黃。

白露のおが姿は其まに

もみちにおける紅の露

一休



雜報

校裡の冬

未葉悉く辭して乾坤轉た寂寥、野塘水涸れて滿ぞ朝の冬  
 自蕭條たり、寒鴉枯木に啼き饑猿空山に吼ゆ、日漸く高うして遠岫銀の如し、飛瓊僅に静まり  
 草花既に化して土となり、籬菊霜に苦んで將に忽ち滅す、村消の雪は斑々として醜女の粉装より  
 節を屈せんとす、此時知らず誰の落英を餐て三りも陋、泥濘道を塞て行に難む、簾を捲くの清  
 閨大夫を學ぶ者々、天や慘、地や愴、風死し虫女、茗を煮るの一休、宗鑑は爐邊に頭を捻り、  
 蟄す、正に是顯頊威を振ふの時。少將は銀鞍に芙蓉を賞す、是が晝の冬。

言ふ勿れ双臉由來情交密ありと、隔宵の燈影衾朔風擔隅に響て寒膚に徹す、眠らんか衾冷かか  
 を射て明又滅ふるの時、蹶起走て後庭に出て、り、勉めんか油盡きたり、暗々たる六疊の室裡  
 氷を敲て井に嗽水を汲めば、身心自ら爽々、忽空しく瘦骨を抱て憮然久時、寒に驚て炭灰を撥  
 ちにして鷄鳴、梵鐘、篳篥、泣兒、海の遠鳴、すれば殘火星よりも小く暖を取り難く、乃ち更

に油を濺ぎ股を刺て適意の書を見る、遠くは流水の響、近くは漏斗の音、夜愈深きを知て又寢を欲せず、忽ち聲あり寒竹雪に折れて空廊に響く、所謂是寂滅應爲樂、是ぞ夜の冬。

湖神怒る

北陸の勝は由來花に非ず月に非ず、鷺毛飛んで颯々、仙鶴舞ふて點々、醫王山は豪鬼として素簾を懸け、蓮江淼漫として白氈を敷く、北は怒濤澎湃の水海に面し南は積雪皚々れ皓嶽を連さ彼に鯨鯢を斬て此に兎狼を獵る亦快からずや、寒や寒、雪や雪、是ぞ金城の冬。

冬の朝、冬の晝、冬の夜、金城蒼林の下、碧瓦天を摩するの高堂に出入り、稜々たる双肩北風を切て意氣昂る者は是吾人四高の健兒に非ずや、

點鐘一度時を報ずれば翁然教堂に馳せ、了れば則ち出で爐邊に集る、毫氣堂々又宰予の痴を學ぶ者かく古今は談し英雄を罵る、小秀吉、小ビスマルク、小ゲートル、小近松、口角泡を飛ば

し頬邊朱を散らす、嗚呼冬は吾人をして一時は英雄たらしむ、是ぞ校裡は冬。

清澄の天瑠璃を流し寂寥の地草花を散す、金風一陣颯として楓葉を拂ひ、冷露一團爛として旭光に映ず、正に是劍氣森然人に逼り渾身は覇圖落々として血に動くの時、底事ぞ辰章校裡人眠り草死し、萎微振はざるの甚しき、三層れ朱樓徒に野分に暴され十町れグラウンド空しく饑鳥の餌をあさるに任す、吁、

余や性狷介事に激し易し、日來滿校情氣のあさましさに堪えず、颯乎箒を郊外に曳て滿腔鬱勃の氣を遣ふんとす、清淨の空色、靜穩の風聲、足は又塵臭き俗街に歸るを忘れ、閑行漫步、忽ち漣漪漾々の水鏡に出づ、問はずして知るは吾

入莫逆の盟朋蓮湖なることを、時に午下六點鐘、

暮色蒼然として樹頭影淡く、萬籟寂として人跡絶はたり、荻花の徐に我を招くに隨て行けば、

只見一株の紅雲落暉を包んで寒村を埋め、數行の歸雁友を呼んで聒に急ぐを、停望少時、聯感何となく胸を塞で監桓去る能はず、思はず叫ぶ、嗚呼是曾て同窓幾多の青衿が……

語未だ盡さざるに後方聲あり、曰君は是四高教室健兒に非ずやと、驚て顧れば寂空々又其片影と見ず、且つ怪み且つ懼れ、低頭瞑目多時、

又聲あり、曰く嗚呼君は實に四高端艇會の一員に非ずや、音吐森嚴命を叱するが如く又笑ふが如し、是に於てり余戦々又仰ぎ見るの勇なし、

漸くにして余曰く然り、彼曰く果して然る乎、何ぞ其れ君れ無情なる、余曰く大人の意を解せざるなり、彼曰く嗚呼世道の薄さ、朝に手を握り夕に面を打つ、昨日知音今日仇、信ざる哉信

ある哉、吾君と交を結ぶ茲に久矣、春風三月、

彩霞駘蕩、人は花に酔ひ月に眠るの時、獨り清遊を喜び、萬頃の波を濯瀝に碎て、鉄腕を吾領域に振ひ、オール時に折れて蓬頭を横にし世を

鼓て豪吟一番曹孟德の魄を奪ふ者は、是卿等の一團に非ずや、秋風蕭殺、人は徒に泣き空を悲むの時、壯心勃々、遠く來て蘆荻は洲渚に桂棹を廻はし、小艇の行く所或は東或は西、波頭れ

月に驚て漸く歸途に就く、眞に是テームス河畔老將の慨ありしは四高の健兒に非ずや、爾來春と秋と、君が同友の豪遊を見ること歳二回を下

らず、今春君が校屈強の七撰手來て龍腕虎脚を奮ふこと二旬、偶々事を以て其舉を廢せ、吾大に之を憾とし私に以爲らく、今日の屈は明日れ

伸を期する所以、天高く月清さに至るべ卿等の活劇を見るを得んと、今や時は來ぬ、天は高く月は清し、而て四高の健兒終に來ざるあり、

君は言ふ端艇會の一言ありと、請ふ其故を語れ、余黙す、彼又語を續て曰く、今春の事吾少しく之を耳にせり、羽檄飛んで會戰の期將に到らんとし、赴きたる七剛士練銀日に創痕を包んで解血江に漲るの苦を忍び、勇氣凜然勝算歴々、鼓旗堂々、將に芳香人を襲ふの墨坡に敵を見んとするの時、宮城野の風轉下、青葉城邊の雲變ず、而も厄に乗じて敵を苦むるは戰士の取らざる所、彼七撰手破顔一笑涙を呑んで装を解きし者固より義然とざるべからず、既于此慨あり何ぞ進んで自ら勵まざる、昔日の有爲、今日の無爲、吾疑ふべくは是同一の人にあらざるを、余獸を、彼又曰く、見よあれ櫻柳をこまませて嬋妍たる墨田の堤上、群衆歡呼の間にオムカを振る朱門有鬚壯兒を、又見や、銀波金波漾々たる滋賀の都の夏、唐輪松に千舌の遺音を探りつゝ、ボートを馳するの好丈夫を、由來氣を以

て鳴るは卿等何爲ぞ彼等に劣らんや、請ふ奮勵一番せよ、且吾不肖、固より琵琶湖の壯なく墨川の優みと雖、亦均しく性を水に亨くる者、豈敢て卿等輕舟を弄するに足らずとせんや、嗚呼吾待ちに待ちし秋は來ぬ、而も四高の健兒終に來ざるなり、舵痕長へに吾面に印せず、棹影何の日に又鏡上に映せん、茫々たる吾地城空を舳取る船に委す、孤雁時に下て寂寥を嘆下、夕陽吾面を射て情をし、短簑の漁老常に來ると雖、自シヤの健兒永く吾に背く、破笠の野人屢吾を誘て利せんとするも、吾豈敢て辰章白練の校帽に背くを欲せん哉、嗚呼已ぬる哉、泣くが如く怨むが如く、余曰く、吾曹常に東都先進の豪懷を慕ひ又大人の厚情を思ふもの、何ぞ敢て自ら好んで之に背く者ならんや、如何せん校規森嚴教課の多端なるを、彼之を聞いて曰く、是亦る哉、是亦る哉、然りと雖是常に有るの事に非

ず、卿等平素學窓に頭を苦め眞摯熱誠、規矩惟守り繩準惟遵への人、時に公然暇を請ふて悠々壯圖に就く何の妨ぐる所や、不敢盤于遊田、適宜業を休んで豪遊す亦可ならずや、思ふに君は是近く四高に籍せし人、恐くは端艇會創立當時の難狀を知らざらん、初め二三子君が校に無爲に激する所あり挺身端艇會の創立に任ず、同志を募りしは明治二十八年四月の事たり、爾來彼等は致々汲々其完成に任ず、入ては四高職員の替を求め、出で、は校外知名の士に説き、學年試業の如き夏季歸省の如き彼等の最重最樂の二者を犠牲にして、以て内外幾多の應援を得、其九月を以て漸く佩々の聲を吾水域に擧げしむ、其辛酸苦楚固より名狀すべからず、其遺緒を嗣ぐの卿等何ぞ輕急漫りに舊俗を廢す可けん哉、然りと雖吾知る是實に卿等の罪にして又卿等の罪にあらざるを、且聞く君が校今や賢明の長わ

諸英之を助け、滿校和衷協同以て事を處せんをす、果して然らば卿等何ぞ勇往直進、一に其意のある所を陳し、請ふ可きを請ひ、勸む可きを勸め、和氣洋洋の間之を成さる、丈夫の襟懷やも洒々落落光風霽月の如くなるべし、之をしも猶能はずと言は、吾又何ぞか云はんや、何をか云はんや、

一冷一熱、擒縱翻弄、余をして顔色をのらしむ、余背汗淋漓此有理の言を耳にして自失すること多時、僅に口を開て曰く、大人の言詞に然り、而も之を行ひ難し、是大に故ありと雖今や萬慮余が胸を衝て之を語る能はず、大人若く強て之を知らんと欲せば、請ふ昆山塔畔暗踏れ雲行に聞け、

僻村の點燈に驚て歩を家に旋せよ、漁歌一聲吾を送るが如く、又笑ふが如し

(戊戌晚秋木露濱記)

豪氣堂々

○中俣教授、は曩に病床に就られしが吾人戚々の愛情は終に天に通トけん、過般再び先生平快の温貌を拜するに至りぬ、欣賀何ぞ堪えん、時正に不順、願くは先生自愛せられよとぞ、

○磯田講師、は曩に陸軍大演習に従軍せられ、

一の鉄鞋萬里れ嶮難を踏破て勇更に勇、胸底鬱結の霸心を攝河泉れ山川に濺がれりと、先生の威風凜凜は更に高さを加へん、

○實彈射撃、秋高く馬肥ゆるの時、歩武整々、鼓旗堂々、戈を上野練兵場に運びしは大學豫科三年の諸士、角一聲空山に響けば、慘として驕ぶざるの健兒銃を構へ、凝氣窒息一に命中を惟期す、嗚呼日東れ男兒、願くは治に居て亂を忘れざれ、

○ウットボール、北風凜烈、草枯れ葉落ち滿校の風光悽愴たり、人は皆蓬頭を窓裡火邊に集む

るの時、何事か後庭喊叫の聲、是かん新任デハ

ビルランド師は創設に係るフットボール俱樂部にぞある、師は是かムブリヂに於ける當年のチ

ャンペン、常に曰く、It is no matter, halting. Showing, rang, Come and play! と壯哉、

推心録 (一)

語に曰く爾有嘉謀嘉猷則入告爾后于内と、吾人固より諫議を職とする者に非ず、恭謹従順、須く校規の示す所に従ひ、孜孜書燈に親むの分あるを知れり、然りと雖苟も籍を校に置く者、常に校を見る君の如く親の如く然り、吾人は之によりて心的に薰陶せられ、誘掖せられ、開發せられ居常動止の規矩標準を覺ふんとするの念切あり、豊雷にイングリッシュ、ゼルマンは蟹文を口にし、ケミストリー、フヂックスの玄理を耳にするを以て足れりとせんや、是吾人が常に校規の久しく行はれたると新に起れるとに

論なく、銳意之が考察と怠らざる所以、偶々以て事れ意に違ひ物の心に背くものあはば、侃々諛々、一は以て校規の完美を期し、一は以て同人の奮勵を促さんとす、爲めに慰師の忌憚に觸れ學兄の激怒に逢ふことあるも敢て辭せざる所、毫も喜戚を其心に加へずして恰も越人が秦人の肥瘠に於けるが如くするは吾人の斷つて忍びざる所なり、今や群賢教鞭を執り衆英學窓に滿ち校風漸く刷新の途に就かんぞとす、吾人雀躍、機の大に逸すべのらざるを知り、隨時隨所、號を逐ふて吾人蜀望の鄙見を陳り以て當路の教を請はんとぞ、藹藹れ言、もとより大耳に入らざらんも寥々の愚衷己む能はざるものは亦所謂臣子の情、吾人豈敢て喜謀有り嘉猷有りと言はん哉○幹生。幹生の設ある已に久し、當初吾人私に以爲なく、是即ち上下意を通り、師弟胸を開く所以、滿校協同の美風必ずや起らんと、爾來累

月積時、未だ曾て何等幹生の奏蹟あるを見ず、是蓋し幹生諸子の罪にあらず、私に思ふ幹生其物に性質曖昧なるに坐す、若し夫れ今日の如くにして改むるなかつんば、幹生は單に一級れ小使的代表者として、時に休課を請願するの具たるに終らん、此の如くんば誰の甘じて之に任ずる者あらんや、然り然らば是徒に無用の贅物たる乎、曰く大に否、吾人少しく説あるなり、其職責、試に一幹生を捕へて其職務とする所を問はんか、吾人は恐る彼必ず其答に窮せんを、是其職務確定せざるあり、職務已に定まらず、何ぞ之が責任を明にするを得んや、責任なきの役員は是木人のみ、土偶のみ、寧ろ是かきの簡易なるに若らざらん、吾人は實に幹生の最必要なるを知ると雖、唯惜むらくは其職責の明確なふざることと、其職責とすべきもの種々、吾人よりして先づ之に容喙する或は其妄僭なるを



恐れて今之を言はず、唯一吾人の切望に堪わざるもれあり、何ぞ曰く

幹生に附するに常に一級を代表するの資格を以てし、之をして一定の範圍内に於て職員間の謀議に參與せしむ

是なり、事頗る異なるが如しと雖、考一考を費せば直に其利あるを見ん、夫れ學舎は規則的集會に非ず、精神的團結あり、否あらざるべからず、和氣霽々裡推讓恭順の間に事を處し、以て高く世道に師表たるべし、而も何事か、方今學風紊亂の甚しき、師弟動もすれば相反目する途上の人れ如く、職工的ストライキは滔々として都鄙の庠序を風靡せんとす、嗚呼是果して何によりて然る乎、曰く協同和衷を欠くのみ、協同和衷を欠くはは何によるか、曰く兩々其意を通ずる能はざるに因る、學生の意何が爲に通ずる能はざるか、曰く其機關なきによる、然り其

機關なる者は衆生に代りて其意を致す所以、幹生は則ち其恰當の者に非ずや、今や賢明精銳は校長閣下のあるあり幹生を置いて以て事の圓滿を計ふる、願くは百尺竿頭更に之に附するに此職責を以てせられんことを、唯夫れ學生はもと根本的に學校の方針に遵ふべきもの、事毎に其容喙を許せば、尾大不振、其害恐らくは計られず、是特に吾人の一定の範圍と稱する所以、其範圍を定むるは一に事の和衷協同を要するの程度によるべきなり、彼の運動會の如き端艇會の如き、眞に和衷協同の實あるを願はば、其所謂大方針と立るの時先づ學生の意に問はざるべからざるもの、幹生の要此に於てあり、

其任撰、幹生に附するに此の如きの職責を以てせば、是實に一級を代表するの榮職たり、何ぞ其任撰を輕急にすべけんや、吾人を以て之を見せしむれば、幹生は其才幹と意氣とに於て全級

は興望に合ふものたるを要す、而も是學識の標準を以て知り得べしとざるもの、首席者必ずしも才幹あるを保せず、末席者何ぞ必ずしも意氣あらずとせんや、この徒に他の驥尾に附して其後塵を拜し、唯々諾々の、私利我慾の者は吾人の所謂幹生たるに足らず、思ふに其任撰の法唯一あるのみ、曰く全級の公撰即ち是也、

○出席點、過度の嚴刻は其善き目的を誤るとシ

ルレルは言味ふべし、近時設けられたる出席點の制、其趣旨や美極、其目的や善極、而も自動的機械たらずして自動的活人たらんとするの吾人少しく疑なき能はざるあり、點付猶金の如し、金は人之を欠ぐべからずと雖屢々之が爲に其精神を腐蝕せらる、點は吾人學生の之を要するものあるも(試験ある者果して廢すべからずとせば)、而も之が爲に往々意氣を銷磨せしむ、一文を草す是點の爲、一書を讀む是點のため、主義

かく本領なく、堂々たる男子一ゼロの前に屈して靦然たり、何ぞ其振はざる、且つ恐る重點は風は其事小あるが如しと雖、積習の久しき、かれ私利惟營主義を馴致し、異日國難に當るの志士として、其品格威望操を養ふ所以に非ることとを、是固より吾人學生の薄志によると雖、抑も亦校規の峻嚴ある一に點を重んずるによらざらんや、殊にこの欠席點の如き、一度欠席すれば點の幾分を減するの制なりといふに至ては、思ふに是酷苛に過ぐるの嫌なきか、吾人不肖と雖遠く卿天を辭一日に雙親經營の膏血を絞つゝあるもの、何ぞ故かくして業を欠くものあらんや、假令二三怠惰に出る者あるも、固はコンモンセンスを有せるもの、一時の欠席は一時の損あり一日の欠席は一日れ失あるを知る、其怠惰なるもの必ずや永續せど、且夫尋中より以上の教育を勉めて自覺的あるべく他導的なるべし

らず、過を改めて善に致しむるに於て、自覺的方法を執るは或は其奏功遲のふんも必ずや堅強、それ他導的の變り易くして亦復舊し易きの比にあらず、嗚呼古の人は己の爲に學び今の人には人の爲に學ぶ、此弊風にして除らざらん、是精神なく生命なきの學、徒に狡智奇策を養ふに過ぎざらん、出席點制を勵行するの結果所謂勉強家をして病氣を勉めても登校せしむるの害を醸すことなき乎、否吾人は徒に此制を峻酷を訴ふる者に非ず、校規の餘りに吾人を小兒視するを怨む者なり、然と雖翻て思ふ、其吾人と小兒視する所以の者、吾人亦其罪なきを得ず、三省一番吾人果して毫も兒戲然たるの舉動なき乎、請ふ滿校の同胞よ、卿等も亦自重する所あれし、

(露濱郎)

### 寸鐵

○語に曰く天何言哉四時行焉百物生焉と南洲翁も詠へり誰知黙々不言裡山是青青花是紅紅余れは沈黙を喜ぶ而のも恐れて黙し詔うて言はざるは余れれ最も厭ふ所あり

○昔は北條氏陪臣を以て國名を執る而かも彼れは勤めて民意に近づきしを以て能く其家を有せり驕然として自ら尊くせば法三千禮三百を作るも亦何を成さん (冷笑子)

○無常即ち常あり、晋楚相反目して吳越忽ち同舟となるのためし、げに頼まれぬ哉人心、禍福變幻、世は何事も廻り舞臺の裏表、觀し來れば一切空と流石は釋迦殿よくぞ唧たれぬ

○俗に僧あり僧らしき俗あり、教育家ぶる學者あり學者ぶる教育家あり、天下厭ふべく且嫌ふべきもの、吾人は何れをの玉上の點となす (黃兒)

○座禪一度學び得て不平遂に悟りとなる、悟る

ものが是か悟らざるが非の、悟若し不平の外道ならば、遠藤文覺の悟亦何の効なしや、人間心愛に此心迷ふ

○豈内自主せる所なく靈心遂に空し、徒々に衆口に拘泥して孤疑遂に山立す、ラッキキ者は省みブル者は敢てぞ、死慾由來凡夫の根性、あな淺まし世なるかか (嗚々子)

### 部長、理事及び編輯員

新學年に來復と共に北條會長が委嘱並びに指命せられしものは

副會長を委嘱す 今井 教授

學藝部長を委嘱す 宮本 教授

運動部長を委嘱す 中野 教授

雜誌部長を委嘱す 浦井 教授

以上十月十八日

### 端艇會理事

艇庫、乘艇、修繕

- 赤澤 欽二郎
- 江間 圭一
- 兒島 亮吉

### 會計

庶務

以上十月十五日

### 雜誌部編輯員

- 大津 胖
- 杉浦 茂
- 田中 秀夫
- 吉村 盛男
- 佐藤 芳太郎
- 佐々木 惣一
- 岡 八
- 古川 美天
- 滋賀 貞
- 藤井 義秀
- 二上 兵治
- 松村 猪久次
- 松村 大吉

(通各)

### 柔道紅白勝負概況

靈芝羅を帶て赤く石上に黏き、峯は慶雲を吐て白く瀾氣人を洗ふ、五彩眼に美はしく秋情爰に閑あり、近々臥龍山頭に望めば、寥廓の長空は

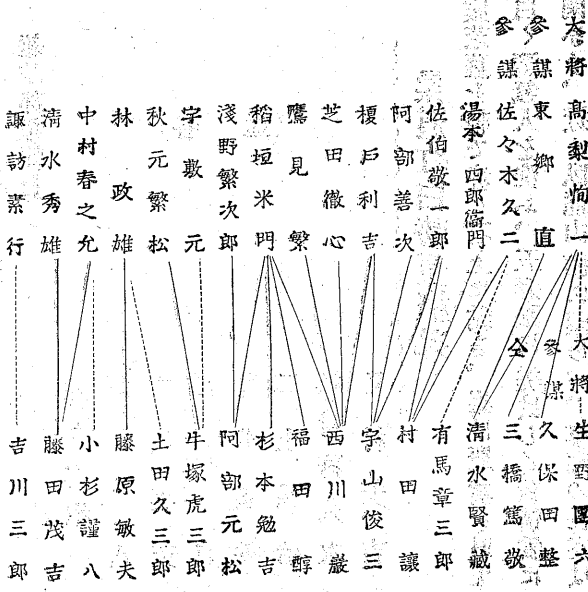


滿郊の黃雲に接して、東に白峯の峨々たるを見、西に寶達の芙蓉を望むのみ、直下一望、千頃の稻田は花を合で戦ぎ、水は織々として岸滑のに、菊は籬畔に金と欺く、浮ぶ鴛鴦の眠正に穩りに、宿る胡蝶の夢正に圓かあり、

孤雲殘月れ宵に、更け行く鐘に、蚤の音を聞ては、輾轉反側、千々に碎くる思は同ト高峯の月か、宿意遂に發して爰に紅白勝負はあり、曰く、來る十月一日を期して無聲堂場に駒搔操かん、我と思はん者は出會へ給へと、喝、脾肉徒らに躍つて夜々に鳴き、渴して水ほしきにも似たる健兒が心腸、松影黒さ處、怪禽一聲耳を掠むるにも似て、蕭條たる萬目の中、時なぐぬ一枝の花を咲のりてけり、

情も勇ましの若殿原、我後れトと前み來る活勢、創虎憤獅の如き兩軍幾十の健兒は

紅軍 (點線は引合) 白軍



また壯絶なりといはんのみ、風のまに／＼翻翻たる兩旗の下、殺氣徐ろに堂に滿ち、萬朶の黒雲は疊々堂上を壓して、微しく般雷は電光を閃か／＼來る、時は至れり刻一刻、機將に急あり瞬又瞬、銀鞍泰かに打たせて將士

今や陣頭に立並ぶ、刻鐘正に二點、岩崎師揚々馬首を回らして身陣頭を退くや、探配一振、敢み、幾多壯絶の光景今果して如何、

紅 諏訪 素行氏

白 吉川 三郎氏

何事か相模的に始まり相模的に終る、其技紅は少しく白に勝るが如く、然も白の腰投に危くされしもの幾回、引分は固より數の免れざる所ならぬ

紅 清水 秀雄氏

白 藤田 茂吉氏

をして代り起たしむ、突如一揮禍を變じて福とみ、惜い哉秀氏其技に巧にして却て茂氏の足拂

を受け損ぬ、意氣得々茂氏亦冷ある哉、然も今や中村春之允氏

を迎ふるに至つては君到底春氏の敵手たらず、無殘其大外落に墮れしも亦是非なり。相手不足の面持に、好き敵ぞ來れと春氏が眉昂れる間も疾く、白軍は爰に

小杉 謹八氏

をして當らしむ、一搏一闘、進退苟もせぬ二氏の姿勢、夫れ何ぞ優にして沈重なる、春氏得々捨身を打て成らず、謹氏亦精悍切りに敵の疲に入らんとして就げず、兩々迭りに身危うらんとして而も快と呼ばしめしもの幾回ぞ、其勝敗の程も少時とは思ひし一刻、可惜遂に休戦の命は下りぬ、其軀其技共に敢て兄といはず又弟といはず、悠々、笑を含んで勇氣更に凜然、相揖して去る再び陣頭に見ゆるの日や何時、兩君幸に自重せよ。

新たに躍り出たる健兒を

紅 林 政 雄氏

白 藤 原 敏 夫氏

とす、健腕相接して僅かに十秒、政氏の捨身は

見事に敏氏亦見事に墮る。氏の得意想ふべしと

雖も

土田久三郎氏

に當つては君更に其勇に似氣なく久氏を買過ぐ

る、何故に遠慮召さるゝか君、何ぞ勇奮して事

を一舉に決せざる、組んで倒るゝと前後三回、

戰遂に決せしめて引分の令に終る。

會々苦雨雜然として礫を流さん許り、暗雲密々

旋風は切りに躍り狂ひ電霆は將に其光鏗を閃か

し來ふんとす。顧みれば兩軍今や其勇勢は如何

に、紅に仆るゝもの僅のに四騎にして、白亦僅

かに一騎を超ゆるのみ。腥風漸く慘として陣頭

に迫り篝火彌爛として影に百鬼の宿れるに鬚鬚

たり。

紅 秋 元 繁 松氏

白 牛 塚 虎 三 郎氏

の見參とある、繁氏の細腰見るからに危げく、

哀れ安々と虎氏の捨身に怨を吞まれしは固より

是非かしの繁氏に代つて

宇 敷 元氏

は今虎氏の鋭鋒を碎らんや、氏亦白面瘦腰の一

好兒、技亦或は少しく虎氏に譲る處あふざるか、

虎氏の得意に捨身は危く元氏れ肯ずる所となふ

んとし、氣息漸く喘々、虎氏亦奮ふべきは勇は

尽く。端なく引分の令は下り兩氏幸に名を耻う

しめずして去るや

紅 淺野繁次郎氏

白 阿部元松氏

は逸疾く陣頭に見はれぬ、淺氏は到底阿氏の敵

に非るゝ、起つて僅の二三合、阿氏得々外巻  
込に入つて淺氏復敢なく起たず。奮然幕を排し  
て躍出たる軀幹長大の一壯漢

稻 垣 米 門氏

滿身の勇は人の知るべきはあれど、見るからに

壯ある哉君が風眸、されど云ふ勿れ阿氏よく邀

ふるの勇あるやあしやと、堂々足踏鳴らいつ揉

合ふと爰に數分、吁阿氏の命や遂に定まるの時

の、兩躰重り仆れて米氏は上に阿氏は下に、無

殘や刻は刻を追ふて阿氏復た不起れ怨兒とはな

りぬ、

福 田 醇氏

突如幕を排して見參を呼ばゝる白旗の下、精悍

其名もゝるき快男兒は誰あふ

杉 本 勉 吉氏

あり、豪然小鼻蠢かし給ふ米氏は悪つきき阿氏

れ仇や、君今其鋭鋒に當るに頼む處は何、風起り

雲生し乳虎又嘯くれば痛快は、夫れ君が精銳の顯

はるゝ所、而も巧に米氏を下に首搔かんと焦つ

て力足らず、流石に無二無三と突き來る米氏が

勇奮は君をして避くる邊なからしめしか、何何

の怯れや君又當年の勇あしや、何を以てか勉て

ふ名乘に報ひんとはする、殊死の意何所に消

へて、きたなくも敵に後を見せ給ひし事よ、君

何すれぞ戦を決せざる、瓦全せんよりは寧ろ玉

碎せよと戒めさえもあるものを、

米氏冷々勉氏を目送して又敢て追はず、更に白

軍の

ならぬ身の其疲を癒やそに由なく爰に其疲れを  
成つて又活劇なし、と見る間も遅く運動家と名  
を取らるゝ米氏の、いりて其名を空ふせん、奮  
起一番、果然大外刈の一撃は哀れ醇氏の落命と  
なる。

さりとて如何に堯勇と頼む米氏の鐵脚も、白軍  
の奮進を耳にして。利氏亦慄悍杉本氏に譲らず、  
巖氏の鼓勇は又更に利氏の憤を招き、巖氏小内  
外に六分を問へば利氏亦大外刈に六分と答ふ、

西 川 巖氏

と搏するに至つては、天晴功名を譲つて巖氏の  
捨身に、笑つて眠りしぞ健かれ。紅軍の代らし  
め。

鷹 見 繁氏

白軍に今

宇 山 俊 三氏

は夫れ巖氏に向ふ螳螂の斧つ非ずか、戯れに出  
でて戯れに米氏の追ひたるが如し、憫とし  
て呆れたるは豈獨り露子のみあらんや。次で紅  
軍は更に白面の二好兒

芝 田 徹 心氏

聲は下より躍り返さん利氏が足藝、怪しい哉俊

氏今更に奮はんとはせで、利氏を起たしめし心  
の底、ふも頼む處あくて叶はん、見事利氏の虚  
に入る足拂一刈、利氏の身は何時り

阿 部 善 次氏

吞で喰る。  
勇心一倍双手を舉げて、来るや遅しと待つ者は  
敬氏、待たるゝ者は白軍の

村 田 讓氏

と代る。昂然たる銳氣は今や善氏が脚に絆はつ  
てよく俊氏を危くするもれ、其技固より俊氏に  
譲らざるもの萬々、而も俊氏が膂力は勝つて善  
氏が鋭鋒を避くるに足り、刹那善氏亦利氏と終  
りを同ふして眠る。俊氏更に甲の緒を止め陣頭  
に嫣然敵を迎ふ、應と答へて紅軍の陣頭に顯れ  
出たるは

佐 伯 敬 一 郎 氏

湯 本 四 郎 衛 門 氏

なり、哂笑一番俊氏を邀へて起つや、姿勢の良  
否を問は、俊氏元より敬氏れ右に出ると能はざ

佐 々 木 久 二 氏

も、尙は俊氏の強健はよく敬氏の怨を買はんと  
するものなしとせず、勇進奮闘、一步は一步に  
苟もせざる間一髪、俊氏は遂に引込返して怨を  
御自讚の手の中今は如何にと、

讓氏焉乎怯まん、久氏亦安ぞ慢らん、讓氏外捲込に入つて成らず、久氏亦腰に入て僅りに殘る、守久氏よ、君が往年の勇何ぞ夫れ出るもの遅きや、見給はぬの紅軍の氣勢、余す所僅かに二將のみと、知らずか源軍の意氣頓に昂として得々たるを、君以て怨なしとするか恨あらずの、見ずや蒼海の怒濤は捲いて紅と散らし、鎌影物凄く、俛乎惡鬼を縦つ所、御座船の行衛は如何にと。果然焦つて突き入る久氏の一撃、敢かくも受は損じて讓氏復た物言はず。

有馬 章三郎氏

と相搏つに至つては久氏疲れ漸く至り、其技其力共に軒輊なきが如く、而も共に腰を計つて策遂に成らず、久氏流石に名を耻かしむるの失はあかねぞ敵刈り仆さんの得もなし、徐ろに心頭に燃へ来る怒氣は默爾と姿を變へ、水を濺がせどみ蒸發しかれど、猛勢、かるに反して有る

が如き、章氏灼然の餘力は以て其疲に入るの策なきの、殊死遂に決せず、爰に又他日の決戦を約して去りぬ。

二將に代つて陣頭に仁王立つは

紅 東 郷 直氏  
白 清水 賢 藏氏

の兩將なり、手を覆へば風とかり脚を翻へせば雲、銳氣胸に溢れて、知らず懦夫をして起たしむる壯絶、蓋し技量の共に伯仲するの故か、守直氏何ぞ夫れ奮はざるの甚しき、奇禍は眼前に横はつて亡命今將に紅旗に追るものありと知らずか、氣怯ばし、給ふてう頼む處有るに由るか、抑も亦以て到底賢氏の敵に非ずとするか、大外刈の八分に必勝は已に業に賢氏のもの、危く亦遂に二分を制せられしも不思議。

颯と柵曳く一旒の旗は鷹の羽の紋所、白鬚の好漢は誰あらふ、校下に其人ありと知られつ

る御大將

高 梨 恂 一氏

久しく見奉らぬ君の武者振、流石凜乎氣は全軍を呑んで起てり、すはや大敵ぞ心せよと云ふ間も遅し、憤恨爰に發して萬丈の炎となり、苦もなく足拂に賢氏を噓せし君が胸中、得て喋語の用もべきはあらず。

眉は昂り肉は動く、今や身を挺して獨り肉薄、直に敵の中堅と衝かんと迫る、恂に欣羨すべきものあり、然も進んで殺さずんば自うら尽さざる可らず、守君が進退一に死あふんのみ。邀へ撃たんと躍り出たる一將

三 橋 篤 敬氏

亦何ぞよく其銳氣を抑ゆるの勇あふん、躄落しは氣味よくも定まつて、篤氏疾く無念の絶叫と姿を替へ。

物々し彼奴何程は事やあらん、見事其虛を突い

て抑ゆべきは我れと、名告りもあへず噪氣く參謀

久 保 田 整氏

亦よく終りを全ふり得いや否、恂氏流石に漸く疲れに苦むと雖も死すべきの時は未だし、龍躍虎嘯れ狀、守遂に整氏少經營も亦精衛が海と化しぬ、握乎聲あり篤氏を追ふて地輔踏む。

健ある哉恂氏、壯ある哉平將、今や立所に三將を屠つて身更に微傷たも負はず、精銳將に加はり勇敢正に凜然。悲腥慘として風雲益急に、噫遂に亦源軍御大將の出馬となる

生 野 團 六氏

君精悍の技は正に比類なしといふもの、今春恂氏の參謀と成て屋島の沖に堯名を博せし身の、今は源軍の將と成て恂氏に敵と君よく白旗と擁して城下の盟を爲さしむるの勇あるや如何に。

恂氏が強勇如何に無比と唱はるゝにせよ、守果

して君が身神の如きも、渠は賢氏を憐し篤氏を  
 薙ぎ、整氏を仆し將に團氏を刺さんとす、可渠  
 も人あり神に非ず、氣息頓に迫つて目皆悉く裂  
 くるを見るもの、亦何ぞ敢て怪まんや、然も渠  
 は切りに攻勢を取つて已に腰投の八分に嘲り、  
 團氏徒らに守勢を過重し孜孜として只守る、元  
 より灼々たる餘裕あるの渠、屢々髯を撫して更  
 に豪然たるの姿勢は、よし怒らば怒れ露子は嬉  
 しと見て却て難するも、亦將なる哉渠の堯勇、團  
 氏も遂に乗ずべきの機なきに苦む。

愉絶快絶、咽を負ふて嘯く虎にあらざれば風を  
 起して雲間に怒る龍も物りは、踊躍處を失はし  
 むるに至つて刹那休戦の命は下り、兩軍は端な  
 く爰にアームドピースを唱して、和氣暢々堂に  
 満つる處、遂に紅白勝負は終る。

露子れ妄評は例に倍して味死固より期すると雖  
 も、亦更に烏口を叩いて罪を重ねるものは、諸

君が攻守各其處に居て、自重し給へる姿勢は過  
 不及なく、守勢をのみ過重せる昔日の弊は一掃  
 去られしかど、爰に厭はしきは勝敗の未だ決  
 せざるの時、要なき口を叩いて徒らに死士れ誹  
 を招くは非事ぞかし、人各好む所あり、又得意  
 たる所にも尙ほ長所短所のあるあり、宜しくら  
 しくを黽めてふる勿れ、空しき借上にぶるは餘  
 り見よきものにはあふぬなり。  
 日は將に晡なふんとし、街燈も早やちふはらと  
 見え初めぬ、疎雨はらくと降りかゝる處、萬  
 籟寂として物の哀れを訴ふること切りに、鶏も  
 啼に入相のつい鼻さきの鐘の聲、耳改まりて快  
 し。  
 (露子一るす)

陸上大運動會記事

るもの、如く首を回らし西南の天を望めば茲に  
 も妖雲低く壓して危機一發將に四百餘州の老大  
 國は山飛河裂の悲劇を演せんとす東洋の多難國  
 家の多事實に此處に萌す此時に當り吾人神州の  
 男兒たるもの豈に細素の間に俛仰し徒らに蠱虫  
 化して止む可けんや況んや秋高馬肥金氣爽涼と  
 して講武演技の恰好時節あるをや況んや先きに  
 端艇競争も事を以て行はれず満身の覇氣鬱々と  
 して空しく脾肉の嘆に耐へざりし吾人半千の青  
 衿に於ておや果然羽檄飛んで陸上大運動の天長  
 の佳節を期して舉行せらるべき事を傳へり各級  
 は争ふて委員を撰出せりされど茲に準備の日數  
 に就きて上下の一致を欠き多少の紛擾を生ぜり  
 委員會又委員會而して何等の準備も未だ成され  
 たるものあらず却て一時は待ちに待ちたる運動  
 會もあはれ不成立の悲運の遭遇せんとせしが衆  
 員の熱心あるいかで斯くして止むべき調停は試

北海の濱頭眺を決して睥睨すれば風雲慘憺とし  
 て畫猶暗く今にも怒濤澎湃の凄景を呈せんとす  
 みふれ折合は付けられ茲に愈大運動會舉行の好  
 運に達せり  
 十一月三日、三日は既に日暎の間に追れり東奔  
 西走委員は準備に汲々たし性急なる武骨漢は早  
 や校庭に馳せて優劣當日第一の功名者たらんと  
 を夢むこそ可笑けれ三日は來れり三日は來れり  
 然るに嗚呼何事ぞ永く續ける晴天が此日に至り  
 て雨ふらんとは張り詰めたる滿腔の剛氣も茲に  
 頓挫を來たし余も彼も相顧みて言に所なく獨り  
 天に對して愚痴をこぼすのみ

翌四日樂しき夢よりはね起きて直に窓を排し天  
 氣如何にと打見やれや何たることぞ又もや空一  
 面に搔曇りて昨來の雨未だ收まらず今にも益々  
 其猛意を逞くせん模様なり半千の健兒萬腔の熱  
 血を、ぐに處ちく所謂萬怒正に發せむとて綱  
 先づ斷ぜしもれ天の一方を睨んで決音し恨綿々  
 引いて長し中にも血氣の運動熱中連は雨を犯し

引いて長し中にも血氣の運動熱中連は雨を犯し



て開會せんとの説を出したれども天候益々險惡  
遂に泣寝入の有様となり終りぬ午后より夜に至  
るも降雨蕭々霏々斷續して至り翌日の開會も全  
く絶望に陥り寢床に入るも夢圓かなる能はず半

場内光景

千の夢魂は去つて運動場裡に彷徨し尾山城裡松  
吹く悲風と怨恨の音を和していと物凄  
翌五日失望に失望を重ねて張りつめし覇氣も其  
大半を沮喪し早く起き出づる勇氣も失せて今日  
も亦雨よと猶昨日の怨とけやうで寢床に縮り居  
りしが續けざまに二發の砲聲は萬雷の一時に墜下  
せし如く爆然吾が鼓膜をつんざけりスワヤ運動  
會施行の砲聲は響たるぞ雨は晴れたるぞと條然  
昨來鬱結し來れる失望と怨恨はあどなく消れて  
再び覇氣は萬腔を満たし覺えず快哉と叫びて蹶  
然飛上り天空を望めば昨來の陰雲己に散し盡し  
て窪雨既に歇み東山の峰尖正に旭曠を吐うんと  
一 天候も亦次第に朗なふんとするものゝ如し則

ち匆々朝飯を終へて校に至れば半千の青衫皆昨  
と打て變り喜色を萬面に溢らして既に己に場内  
に我も我もと寄かけたる事實に愉快の極かれ  
本年はことに校長よりの命令によりて萬事實素  
を旨とし且つ二日も雨降りつゞきし事あれば場  
内何となく物足らぬ心地せるぞ遺憾なふざれど  
旭輝己に東天に登ればまた亂れ散らざる草露は  
一面に輝々たる玉を連ね輕雲うすく棚引き眞紅  
に色どるつたるへで二月の花よりも紅にそよ吹  
く風も暖く焉然これ春日の光景高く聳へたるア  
イチをぬけて場内遙に見渡せば大旭旗幾流と奇  
く場内中央高く四方八方に曳き張られたる外は  
國々の七色旗と翻々醫王の風に翻り常の如く紀  
念櫻は傍大榎の枝に掩はれて一段高く會長北條  
校長は嚴然として其坐を占め左右には來賓席金  
譯音樂隊席競技者溜席醫學部病院諸學校生徒席

等劃然として設けられたり賣店造り物などは殆  
んど皆無の有様にて唯大松樹の下寄附金無用の  
大札打たる醫學部一年の醫一庵をそれに隣りて桂  
月堂のパン屋又西の方豫科醫科の三部亭のみ場  
内の寂寞を破るのみ常に賣店造り物とに熱申し  
て目も見へざる法科の外交科連も今年はその勇  
氣全く失せて聖人となり濟し只醫者連の跳梁に  
任かしたるぞ無念かれ  
已にして時針儀は八點を報ぜり一聲の砲聲と共に  
係員はそれ〴〵其持場々々を固めて若殿原  
に晴れの競技見てやふむと諸方より老若男女紳  
士令嬢はや痒々どつめりけ來れり

勇士の面々勝負の事

第一回 二町競争

競技者呼出ししベルは烈しく續けさまに響けり  
溜席よりは今う〴〵と待ちこがれたる勇士は面  
々襦袢股引は打扮軽く跳りいで、鉄脚ふみしめ

われみそは天晴れ今日の先登者よと功名心は萬  
身に漲りてまた駆け出でもせぬに己に流汗した  
り青筋いらだち天邊より湯氣沸き立つ様いと  
かうし用意の笛は響きぬ若殿原の御耳には如何  
に轟きけむはいふちて駆け出でしものもあり  
ぬ今や場内げきとして聲なく萬目の視線皆注い  
で一處に集まれり危機一髪ドン！號砲の響滿引  
の弓矢は弦を離れて飛びぬすかさず跳り出るも  
あり又餘り張りつめし氣の俄に弛みて茫然途を  
失ひ急に思出でし様に四五歩も後れて駆け出で  
せるもあり皆スタート、へビーれ凄くさ焉然疾  
風の枯葉を捲くが如し大はのへりて小に後れ肥  
は薩摩芋をぶろろすが如くに仆れ瘦は敏なるこ  
と獵犬の如くに迅し白飛び赤跳り青のけり勝負  
の程も知れざりしが半周の頃薄青衆を排して  
進めり拍手喝采山を崩すが如く彼れ勇益々加は  
り韋駄天走りに走りて決勝點に跳り入りあり

此名譽の先登者を誰れとかかす姓は中野名は深君

一等 中野 深 二等 榎戸 利吉

三等 鈴木 庸生

第二回 二丁競争

總勢舉りて十八人湯本四郎右衛門と名のりて觀客に上下兩刀嚴めしき御老中様れ再來りと怪ませるもあり松村魁と名のりいで、今度の先登者は此殿原かと羨ませるもあり武曾三郎と名のりいで、武者修行に日本國中の道場踏みにとりたる劍道は達人のと思はしむるもありされどあはれやこれ勇士の面々佐々木冠者菊若丸と名のり出でしいと優形は御曹子が健脚にうりて皆枕を並べて打死してけるやあはれかる

一等 佐々木菊若 二等 大多和忠二郎

三等 高澤辰之助

第三回 提灯競争

由來此技堂々雄飛の技にあらねば重に蒼顔瘦骨奔躍馳突に堪へざる野次馬連萬一の僥倖を望んで我もくんと馳せ集まれりされど此技も張良諸葛の變に應じ機を制するの兵法を知らずては御勝利の程覺束なきとなり或は狼狽して蠟燭を失ふもあり後れ馳にあへぎ來りて提灯何處とたづねあるき優長にせいては事を仕損るとつぶやくもありいらちく早きが勝負と叫んでマツチさかしまにするもありあぶぶかけるもの坐せるもの中腰になれるもの皆それく自分免許の兵法を實地に行はんとあせる様笑止や焉然これ平氏富士川は陣瀾癩玉をふり起して其儘大死とげし弱虫連を除いて立ち上りしもの十數人提灯には意を留めず一目散に走り決勝點に入つて始めてその消えたるに驚き最早引かへす勇氣もなく次團太踏んで無念の皆決するもあり餘りに提灯にのみ意を注ぎてつづき仆れ打死するもあり

優々緩歩急かず逼らず遂に恩賞に有附きて鼻高めるもありつまづくもの仆るゝもの匂ふも腰を曲がめて走るもの皆一人としてまどめなきざるはかくこれ百鬼行列捧腹絶仆の極觀客の哄笑

は百雷の如く少しの間は鳴も止まざりしが天晴

れ擊劍界の霸王稻垣文二郎君兵法圖に當りて第一着に決勝點に入り喝采沸くが如し眞に氏の如きは竹刀強敵を制する術より入つて此技の秘傳を得たるもの文二郎君須く自愛してこの秘傳を失ふよとかりれ

一等 稻垣文二郎 二等 杉本 元亞

三等 喜多 孝治 四等 平倉 保市

五等 竹松 衛

第四回 二丁競争

運動界の寧馨兒田宮春策いつもの如く衆を後にし一人最先に進みたりしが正に決勝點に至るの頃ひ鈴木清藏追躡する處とかり遂に同着と審判

官は叫び出でたり而し抽籤により一等賞は依然

春策君は手中に落ちたり

一等 田宮 春策 二等 鈴木 清藏

三等 伊 佐 壽

第五回 二丁競争

稻垣米門の長髓彦もあはれや蒼白ある大漢の爲に破られ終りぬこれ大漢と誰れとかなす姓は米

澤名は恭二

一等 米澤 恭二 二等 稻垣 米門

三等 橋本喜久三

第六回 スプーン競争

疾く走りざるべうと走らむか凹少きスプーン何ぞ軽きこと羽毛れ如き球を保つことを得む緩歩以て球を落さむとつとめんう遙に人後に残さるゝを如何にせむ嗚呼スプーンの技も亦難い哉砲聲一發既に驅け初むれば未だ十歩ならずして球を墜すもの大半時あふぬ初霞の眺面白や



墜しては又スタートに歸り歸りては又新に兵法を變じて此處を大事と驅け出しかく前後進退するもの櫛の齒をひくが如く二度墜して絶望するも此もあり三度墜して叶はぬと啣つもあり四度墜して猶スタートに歸りこゝを詮度とかけ出すもあり滑稽の極人の頤を解さ反つて泣かしめたり此レース長身焉然雲助の如きもの優に他より十餘間を進み濶歩決勝點に入りしも不正の行爲ありとし審判官よりアウトを宣告せられ一等は鈴木準繩君の頭上に墜ちたり

三等 石塚 維巖 四等 小倉 一英  
五等 櫻林 格造  
第九回 二人三脚  
此技は二人能く動作を一致するにあらざれば決して勝を制せべからず故にふれ尤もトレーニングを要するも然れども種々の事情の爲め且つは降雨の爲め競技者諸氏のしるを得ざりトレーニングとは物々しや一昨年以來一度も敵に後を見せぬ北陸一の旗頭生野の團六此處にありと我が腹心の郎黨赤澤欽次郎を率て跳りいでたる勇ましき次で憎らしや團六が廣言今に見ろよと徐々と出て來りしもの都合七組いづれも骨格逞ましく一騎當千のつはものどもよと源平打並べてはやさぬものはあつたりりし程に砲聲は轟きぬ先づ第一におどり出でしは赤にし

第七回 二丁競争  
一等 鈴木 準繩 二等 吉野 林翁  
三等 宇佐美全賞  
第八回 提灯競争  
一等 伊野宮長民 二等 横地 廣一

て次で白れ生野赤澤の兩勇士疾風の如く飛び行

きしが半周に至る頃ひ青俄然猛威を鼓して二十三ノット全速力にてまたく間に白を抜き赤を後にし大勝利をぞ奏しける扱ても哀れなるは御大將生野の團六殿初めの高言に似もやらで赤にさへ先を越され空しく骨を砂礫の間に洒したるぞ實に弓矢の冥加に見放さりと云ふべきか

て網環を飛びぬけ横木を踰へ最後に土方と變て土俵を背負ひて決勝點に入る所謂これ七化の怪物を演ずるもの其勞決して少々にあらざりなる哉戦勝者大抵決勝線に入るや否や顔に血色なく脚も亦体を支ふるを得る能はずして仆るゝに至るや萬一を僥倖する彌次馬連の如きは未だ半あらずして既に齷齪逡巡機を逸することや吁此七化を演じつゝして先登第一名譽れ怪物となりしものは誰れぞ姓は橋本名は與三郎氏

- 第十回 二人三脚
  - 一等 榎戸利吉
  - 二等 中野 深
  - 田宮春策
  - 鳥海他郎
- 第十一回 障害物競争
  - 一等 駒井定哉
  - 二等 村田 讓
  - 藤原敏夫
  - 高坂勇次

第十二回 戴囊競争  
頭をいたげる囊にのみ意を用いて脚其速力を減じ遙か人後に落ち最早駄目ありと絶望するもの又脚の速力を無茶若茶に早の頭上の囊を全く忘れ俄然落下するに及んで臍をかむとも詮なく萬事止矣と切齒するもの半ば囊の落ちかゝりた

前方二町が間に横はる障害物その幾許なるを知らず忽ちにして水車となり一回轉するかと見れば直に變つて脱兎とあり横櫓をぬけ地網にもつれ又猿と變つて高きに登り身と跳ぶて飛下ると見れば忽ち駿馬と化して濠を飛び越へやがて輕業師となり棚にぶら下り綱を互り飛鳥となり

第三回 渡部福太郎

るもの手もて囊の落つるを支え審判官にアウト  
とせざるもの宛然これ一幅の鳥羽繪大雅北齋  
をして此場にあらしめ果た何と云はむ

- 一等 三橋 篤敬 二等 赤澤欽次郎
- 三等 藤原 敏夫

第十五回 旗取競争(テハピランド氏等贈賞品附)  
由來此技身体疲勞するを以て有名なるものされ  
ば後の勝負をおもん計りて競技者至て小數花々  
しき勝負ありはいと遺憾なりし而してその  
距離も昨年より一層遠くして競技者の身体疲勞  
尤も甚しく脚こり第五回目には皆蹣跚恰も泥  
醉者の如く決勝線に入つてドツと仆れたるはさ  
こそと思ひやられて實に同情の感にたへざりし

- 第十二回 戴囊競争
- 一等 宮崎 稻作 二等 小野 連三
- 二等 横地 弘一

第十六回 障碍物競争

- 一等 佐伯 亮齊 二等 村田 讓
- 二等 竹花 武壽

第十四回 二丁撰手競争 メタル  
皆これ健脚八町二郎の徒已に一等ある月桂冠を  
戴き來れるもれ其名譽や高く其責や重し初め中  
野氏衆を抜いて走りしも半にして佐々木の御曹  
子菊若丸之を抜きメタルは我がものよと頗る得  
意の様なりしが忽焉蒼白れ一長漢彼に逼り又彼  
を後にして決勝點に入り輝々赫々たる名譽のメ  
タルを握りたりこれ云はずとも知らむ醫學部に  
其名も高きチャン米澤忒二君

- 第十六回 障碍物競争
- 一等 大塚 廣道 二等 前田 松苗
- 二等 島峰 徹

かれども身体自由ならず見事一度にはね起き立  
上りも半ならずして又倒れ空しくそゝに  
打死し又勢よく飛出したれどサックを踏破りて  
足出でしを知らず已に決勝線に入らんとして審  
判官の見るところなりアウトせられしもあり再三  
再四立ち上らむとして失敗し已に勝負決せし後  
に漸く立上りしもありこの競争も亦觀客の頤を  
解き洪笑雷の如し

第十七回 サック競争  
サックにつままれ枕を並べて仰向に打ふたる  
處埃及れミイラと云はむ距離は僅かに一町許

は平然腰を曲め草鞋をうがつもれ或は背囊をつ  
けつゝ走るものその兵法皆十人十色にして一定  
したる處なしことに可笑しかりしは例の生野氏  
が狼狽の餘り一の草鞋の緒を他の「ち」に通し  
たることありしこれが爲め今度も亦あたら勇士  
を死かしてけり

- 一等 松原 武 二等 河合 文治

- 一等 伊野宮長民 二等 眞柄佐一郎
- 二等 河野 勇

第十八回 武裝競争

- 一等 杉山 榮 二等 木内喜右衛門
- 二等 小原次三郎

孫子吳子の末流を汲で出て來りしもの十四人或  
は先づ服をつけ草鞋をうがち背囊をつけ劔を帶  
び銃をになひ順次整然と武裝するものあるかと  
見れば先づ服はつけしも草鞋劔背囊銃等をさら  
へ提げ決勝線より四五間の處にて急に止り武裝  
し初むるもあり或は走りつゝ上衣を纏ふもの或

第二十一回 綱登競争  
これも何故か競技者至て小數もとより花々しき  
勝負なし白の志賀氏尤も敏捷にして見事第一番

に旗を攫み下り始め、而も中途にして如何なるはづみの手のたもちを失ひ俄然墜落してこれが爲めアウトとなりしは實に遺憾千萬

三等 長島 清松  
第二十四回 戴囊競争

一等 鳥海 他郎  
二等 加藤省三郎

一等 兒島 亮吉  
二等 三谷 美種

二等 飯田 壽男

第二十二回 旗取競争

第二十五回 スプーン競争

一等 關野 某  
二等 田宮 春策

一等 村 幸長  
二等 福岡 喜洋

三等 高澤辰之助

二等 龜田 伊門  
四等 山岸理一郎

第二十三回 四丁競争(テハピラント氏寄贈賞品附)

第二十六回 スプーン競争

健脚勇士の面々ベルの響と共に己に出て來りて

一等 佐々木菊若  
二等 松田龜太郎

スタートラインに整列せり或は長脚にして走る

二等 濱口 廣海  
四等 佐伯 亮齋

の如きもの傍觀者豈あふかしめその勝敗を下す

第三七回 二人三脚競争(メダル)(テハピラント氏寄贈賞品附)

るを得んや然りと雖もひそかに吾人は望を紫の

面々二人三脚なれども歩行整然亂れず疾きこと

米澤氏に囑したりしり豈計らんや白紫の伊藤秀

恰も飛ぶに似たり田宮榎戸の兩氏運強さか果た

氏駛するふと疾風の如く容易に米澤氏を排して

又大に他に勝るものありしり光輝繁爛たるメタ

第一着に決勝線に飛び入れり

ルは又兩氏の胸を飾ることとなりぬ抑も田氏は

一等 伊藤 秀  
二等 米澤 享二

身長常人よりも遙かに高さもの之に反して榎氏

は辛ふすて五尺に滿ちるも此不平均なる体軀

を以てゆく勝利を得るかど怪むもれありしに田

氏微笑を洩して云へくおれ我が秘密の兵法

のみと我は今回の競争に於て田氏を當日の大立

物として長く運場會れ紀念に存せんとす氏の如

きはこれ滿身凡て皆膽にして高材疾足武勇三軍

に冠し所謂チャン中のチャンなるもの氏大に自

愛して長く此覇氣不運の精神を失ふおれ

メダル  
田宮 春策  
榎戸 利吉

第二十八回 戴囊競争

何の面白き勝負もかくいと好運にて一等は柏原

一等 稻垣文二郎  
二等 増田 年雄

氏の有に歸たり鈴木氏は二等ありしも余輩は

二等 田上 清眞

柏原氏より寧ろ氏に囑望を寄せんとす何とあれ

第二十九回 巾飛競争

あるを以てあり鈴木氏の我校に來ると共に運動

巾飛竿飛にて勇名三軍に轟きたるハンデー附あ

家たるの雷名は已に校内に遍かりき而して吾人

の杉本勉吉氏事を以て來らざる遺憾々々競技者の

はことに氏の名譽を表彰せん爲めこゝに君が贏

中にも當れ敵を失ひたりと古の謙信を學びて打

得したる競技を列記せんとすスプーン競争一等

のこてるもあらたり初め柏原氏十六フット八イ

賞、高飛競争二等賞、竿飛競争一等賞、戴囊競

争一等賞、戴囊撰手競争メダル、氏の如きは實遺憾々々 (杜鵑子)

午後

燭龍天に中して三々五々立去りし觀衆も三椀の餉に空しき腹や満しけん垂髻班白青春妙齡滿潮の如く押寄せ來り平地に起す人波は分は分より高まり來りぬ

其間も競技は絶間なく演せられぬ

第三十二回 武裝競走  
一等 河合 文吉 二等 丹治 善藏

第三十三回 提灯競走  
一等 千代庄三郎 二等 鈴木 秀俊  
二等 土田久三郎

觀者皆皆を凝らして手に汗にぎり勝負如何にと  
打見やりしに何故の柏原氏は忽然胃をめぎ刀を  
投げ自のふ二等に甘んとして鈴木氏の馬前に降れ  
り嗚呼柏原氏をして刀折れ矢竭き休れて後止む  
とと張巡許遠の如きあらしめば名譽の月桂冠果  
たして誰れが手に落つるや知るべかふざりしは

第三十四回 四丁競走 一分十九秒  
鏘然たる鈴聲と共に前身等しく傾き膝腕悉く屈  
せり爆然たる礮聲と齊しく脱兎の如く駆け出で

し關野氏の勢中々當らるべうも見えざりしが漸  
く脚力を虚脱して始めれ勢をこへやふ速力次第  
に減じ來りしを得たりと抜き出でし吉田氏は  
てやつたりと云はぬばうりに韋駝太の如く一目  
散に駆け行きしが危機一轉快勝線間際にして挺  
身一躍忽然として紅旗の下に立つたりしは豈圖  
ふん黄冕の大將南氏からんとは

を注漸すれども茲一寸大磐石の如く動るざるも  
ねばしや物々やと怒り引ける一刹那ありし  
と音して綱は半よりふつと切れ鯨波を上げり  
人垣は左右に堂と崩れたり  
第三十六回 綱登旗取  
此技固と健脚を要せざるもれ穿鞋のまゝ何の苦  
もかく上下して而のも次賞を得たる柏原氏の得  
意羅生門の鬼臂を獲たる心地やしけん

一等 南 大曹 二等 吉田 幡誠  
二等 關野 謙三  
第三十五回 戴囊競走  
一等 鈴木 準繩 二等 武田 正壽  
三等 玉木 薫藏

第三十七回 竹馬競走  
名も福松の石田氏刻んで奔る駒の足並麗しく續  
く佐々木もあつばこそ驀地に駆け散らして今日  
の先登と呼はりたる無残ありしは江間れ守殿三  
番登は我物と左顧右盼悠々として進み給ひしが  
如何にしけん駒の前足踏折りて真倒に馬落し給  
ひし御有様は見る目さへ御いたはしの限をか

此間我黨の壯士と我繼承者たる尋中の健兒との  
綱引れ競争ありたり彼も一校の名聲を博せんと  
願ひ我も我校の體面を保たんと欲する者一步も  
仇に許すべきエンヤくの掛聲鋭く満身の精氣  
を雙拳に鳩め足を金剛輪際に据え互に全幅の力

第一等 織田 強見 二等 柏原 省私  
二等 早瀬 三求

第一等 南 大曹 二等 吉田 幡誠  
二等 關野 謙三

第一等 鈴木 準繩 二等 武田 正壽  
三等 玉木 薫藏

第一等 織田 強見 二等 柏原 省私  
二等 早瀬 三求

第一等 織田 強見 二等 柏原 省私  
二等 早瀬 三求

第一等 織田 強見 二等 柏原 省私  
二等 早瀬 三求

第一等 織田 強見 二等 柏原 省私  
二等 早瀬 三求

り

- 一等 石田 福松
- 二等 千代庄三郎
- 三等 秋山 信次

第三十八回 一分間競走

一分を限りて競走の距離を争ふも彼れ孟憤が勇を奮へば我れ北宮雄が忿をち猛然として走り轟然として抜き孰れ劣らざる見えたりしがあはや二周半ばにして手負獅子の如く眞一文字に駆け抜けつゝ轟然たる砲聲と共に第一賞を獲たりしは則ち稻垣米門其人ありとす

- 一等 稻垣 米門
- 二等 鈴木 庸正

此時餘興として打球競争は演ぜられたり源平組を異にして紅白の小球を編袋に投ずるもの鈴聲忽として鏘鳴すれば敵味方互に入り亂れてこゝを先途と争ふ有様は梵天花を雨らし福神槌を揮ふにも似たりけり互に輸けじ劣らんと四途路になりて揉み合ひしが正に與みする天道は邪に驕

る平家や見放しけん編袋の中砂は秒より白球其多きを占め早や停技の號鈴は鈴鎗として鳴り渡りたり

一浪捲き去て一濤來る續て法科二年の寄附に係る小學校生徒武裝競走は校せられたり簇々數十の紅顔子が窄袖短袴身輕の扮裝に後鉢巻も甲斐々々しく見ん事今日の初陣に敵の老練者の頸かき切りて父上母君が天晴れでうしたとの御讚詞を得んものをと功名のほむかは頑是なき胸にも燃えて出發點に身構へたる有様は是がこれ名に立てる白虎隊の偉ありける鈴聲響き號砲答ふれば疾くや遅しと駆け出でし花の若武者前垂を着け胴を纏ひ面を蒙り籠手を穿ち囁々我劣くと馳せ行く有様は勇ましくも亦健氣なりき

第三十九回 四丁撰手競走 一分四十三秒  
撰手は是れ共に功を大極に收むるもの宜かる哉  
二周半ばに臻るも尙輸贏の微候をぞも窺ひ得ざ

女しことを警然咄嗟機々轉瞬伊藤氏は稻妻の如く閃き見でしよと見る間に有繫れ南氏も遂に續かん術もなく紅旗は早くも伊藤氏の頭上に振ら

- メダル 伊藤 秀

第四十回 提灯競走

- 一等 秦 又四郎
- 二等 田土 清貞
- 三等 平瀬 享二
- 四等 岡本 重保
- 五等 酒井 整吉

第四十一回 スプリン競走

- 一等 増田 年雄
- 二等 早瀬 三求
- 三等 駒井 定哉
- 四等 平倉 保市

斯技終て各小學校生徒三人四脚競走は餘興として演ぜられたり今や東西南北哇鳴雀噪の聲は俄然破れて各校の撰手を聲援すれば蹶躑躅として駆け出せる三頭四足の怪物がこけつ轉びの必死にあつて先を争ふ可笑き狂態能く觀衆の頤を

解て拍手拵掌九鼎の沸ぐに異ならず

第四十二回 スプリン競走

- 一等 中元長三郎
- 二等 宇佐美全賢
- 三等 喜多 孝治
- 四等 小杉 謹八

第四十三回 武裝撰手競走

共は是れ一たびは紅旗の下に其輕快を賞せられし者彼今ま帶劔の所に抜けば我復た背囊の所に追ひ落し雙龍珠を争ふ互角の争は觀客をして覺えず手に汗を握らせしが發矢圍周の七分底に於て遽然伊の宮氏一三歩を抜いて結局勝利は伊の宮氏と定りしが如何にしけん未封の扣鈕ありしが爲め審判の結果メダルは終に河合氏の手に歸したり掌中球を失ひし伊の宮氏の恨事はさるものうら邪は畢竟正に敵せず顔に退然として引上げり河合氏の得意亦想見すべし

メダル 河合 文吉

第四十四回 片脚競走(二丁半)



口角氣を吹て或者は騷臺の如く或者は風蛤の如く大兵小兵必死に飛び行く中を真先に駆け抜けて雨蛤の如く小足に飛び行く小兵は勇士はそもや誰

駝鳥の如く駆け行け、やもどかしやと武り立つたる松原氏は疾風は如く駆け抜け、く懸立つ敵を尻目にかけてすつくと立つたる有様は正に是れ孤松岳々群木を壓するの概

- 一等 山木秀太郎 二等 江間 圭一
- 第四十五回 旗取
- 一等 中野 深 二等 秋本 繁松
- 二等 金山 季逸

此間臨時競技として本校教員デ、ハピランド師と基督教宣教師ノルマン氏との二輪車競走を校

- 第四十六回 六丁競走 二分十八秒

強驅駢脅或は呼吸の持久を恃むもの或は無雙の健脚を誇るもので真一文字に駆け散らして日頃の手並見せて呉ねんと心火既に一身を焼いて合圖の號砲打つや遅しと身構へたり信砲一發猛虎欄を脱して人は魚鱗にあつて駆け出せり名に負ひたる駒井氏は恰も天馬の荒れ出せるが如く二回周尙身を挺して前に在り昔日の藤田氏今れ西野氏は獠者の巨猿を逐ふが如く踵を接して

此間臨時競技として本校教員デ、ハピランド師と基督教宣教師ノルマン氏との二輪車競走を校せり器は是れ一轉千里主は是れ名代の長髓爆然たる砲聲と等しくテイタン電車を驅て天上に入るが如く倏忽として乗り出でしがスタートに抜きしハピランド師はしてやつたりと駛せ行け抜き後れたるノルマン氏はは死ななたり一大事と躍起に狂ひ回り甲斐ありて二周半ばにして見事に氏を追ひ落し虎視眈々第三周も事あく抜き續けてレディイストパースは同氏に歸せり而かも四圍クラッピングの破れざりしは奈何に

第四十七回 障礙物撰手競走

敏滑の奇術輕快の靈腕共に弟たり難きもの龍驤虎鬪神出鬼没の壯觀を見んことは我人共に期せるところ號砲一響萬籟を破て雙士脱兎の如く駆け出でしが間一髪先づ地網を脱け出でし田中氏は得たり茲ありと勇を鼓し高柵圓環首尾能く抜き終せて脚は先づ快勝線に在り

- メダル 田中 秀夫
- 第四十八回 綱登旗取
- 一等 辻村 喜信 二等 稻垣 米門
- 二等 小倉 貞吉

第四十九回 一脚競走(一丁半)

此技元來赤澤氏獨占舞臺芝田氏亦侮る可らざるもの借問す一昨及び昨年第一賞は赤澤氏の物にはあらざりしか客歲の第二賞は芝田氏の物

- 一等 赤澤欽次郎 二等 芝田 徹心

第五十回 戴囊撰手競走

練り出したる五人の勇士孰れ不敵は豪の者誰か最も頸骨の固定せるもの予見よ五人は健兒は駆け出せり抜きつ抜きれつ一陸又一陸決勝の機運は鈴木氏を驅て桂冠は正しく氏の頭を飾れり

- メダル 鈴木 準繩
- 第五十一回 スプーン競走
- 一等 林 義輔 二等 岡藏 尙太郎
- 二等 橋本新太郎 四等 小國 清吾
- 第五十二回 提灯競走
- 一等 鈴木 清三 二等 竹村 榮太
- 二等 長島 清松 四等 秋山 信次
- 五等 河野 勇

第五十三回 竹馬競走

躓倒する者失脚する者嵌落をる者五位鷺の河を渉るが如く蹶々蹠々たる真唯中を駆けぬけて猛然快勝線に躍り入つたる關口氏の技倆見覺しき

ものゝ限なりけり

一等 關口通太郎 二等 小幡 豊治

三等 荒木榮三郎

第五十四回 提灯競走

一等 丹治 善藏 二等 宇佐美全賢

三等 松田龜太郎 四等 飯田 壽男

第五十五回 擔荷競走

樹靜あらんと欲せれど風止まずとかや走ふんと

ずれば肩は重荷の左右に振れて却躰蹠跚れ字を

踏む脚元殆く走り煩へる其中に名も奥山の龜藏

氏肩に覺えのありやなしや易々として驅けぬけ

第二賞を獲たりしは近頃珍しき御手際なき請

ひ問ふ敗軍の諸士重荷擔ぎて賃取らざれば嘆な

りきや否

一等 奥山 龜藏 二等 増田 貞吉

三等 富田 稔麿

第五十六回 各學校撰手競走(四丁)

(赤) 石川縣師範學校

(緑) 石川縣第二尋常中學校

(黄) 石川縣工業學校

(紫) 眞宗加賀中學校

(赤白) 高等學校豫備學舎

(赤緑) 金澤英學院

(黄緑) 曹洞宗中學校

(赤黄) 育英社金澤講習所

各校の生徒呼號の聲は今や出發線上に彼等の撰

手を送り出せり侵露乘星大任は彼等の雙肩に懸

れり一歩もいかに仇に踏まんや銃は響きぬ銃丸

れ如く驅け出せり目覺しや二周半ばにして緑絆

士脱兎の如く抜き出でしよと見えしが續く勇士

もあちばこそ紅黄の二旗は早くも彼等れ頭上

振られたり嗟嗚千秋愆々の恨塊を一たびは客年

の演技に雪ぎ二度今年の演技に添ぎし彼等健兒

の大氣鋭記を筆の跡さへ烈々人を焼くんとす

一等 尋中 二等 同

二等 師範 四等 工業

第五十七回 職員競走(二丁) 三十五分

鳳眉薄毛の北條校長、皓腕纖腰の大鳥教授、臍

膚髻髻の長矢教授、嬋首美髻の藤井教授、修身

長脚のハピランド師、白哲美裳の金井講師、柳

眉豊頬の村田助教授、丹唇救面の福見助教授、

直身鯨顔の宮川助教授、臙肌熊髻の岩崎先生等

今や競走れ清興に驅られて斜々一線に居並びた

り刮目せよ咄嗟砂礫を蹴て電車の如く驅け行く

一將を六尺を抜ける長脚子誰の及ばむ一氣直往

大躍大踴七八間れ大差を以て脚は業に決勝點に

聲あり特に當年の斯の技に於て我會長北條閣下

が率先して競技し給ひし事の如きは近來希觀の

美事のみならず斯くてこそ始めて我運動會れ隆

盛を期すべきものなれば吾輩茲に感謝の涙を揮

て長く我運動會誌に特筆大書せんと欲するもの

也

一等 デ、ハピランド 二等 岩崎 法賢

三等 宮川 爲三

第五十八回 來賓競走(二丁) 三十四分

奔馬抑を脱して眞先に進み給ふ八の字殿はそも

いづくの御方ぞや結局桂冠は君が物と何關係も

なき記録係まで竊に望を屬せしに月雲花風疾驅

半周に至りし刹那猛然天馬の如く抜き出てし

無髻れ小殿原はそもや誰尙ひたぬきに續けて月

桂枝は空しく君が纖手に手折られぬ

一等 岩崎某 二等 富田 工學士

三等 中山某

一去一來六十餘回の競技も今や残り少なくなり

ぬ願みれば故城百尺の岬頭を燒きし落照今や名

残なく光をかさめて蒼然たる暮色は早や萬象を

埋み果てなんとし群衆の影漸く薄れて高張提灯

は場の四隅に立てられぬ而かも熱心なる我校本



千の健兒誰か張膽明目這般の大活劇を瞥見せざらんや

第五十九回 二哩競走(學士會寄贈)

腥風の下暗雨は裡龍飛び虎躍る驅り出たる三

十は魏狄正に是れ一種の猛獸園野心勃々霸氣萬

丈情火一身を燒きて意馬心猿摩するに由か

周二周は尙處女の如し鷹視鶻瞬各々持重して人

は三回を終るも我は猶二周を走る聚りては散

合しては離れ驚雁亂鳧闇を縫うて走る有様は恰

も是れ瀾大なる走馬燈の如し四周は過ぎ五周は

來れが速力は次第に速まり來り人は漸く減む來

る警然喘嗟唯見る斯界の勇將松原氏は脱兎の如

く驅け出せり而のも快勝點を距る僅かに數間豈

圖らん紅旗は既に老然たる勇士の頭上に振られ

をとは宣哉彼れ白眼卑劣の士は尙一回を周らざ

るも暗黒の裡尙ほ公正の天眼あることを知ら

ずや

一等 松原 武 二等 小原貞吉

三等 稻垣 米門 四等 稻垣文二郎

五等 駒井 定哉

第六十回 各級撰手競走(西丁)

ユンケル氏寄贈賞品附

赤 大學豫科 吉村 盛男 第三年 佐々木 菊若

緑 慶應 四葉 利吉 第二年

黄 小池 新一 第一年

紫 吉田 密誠 醫科 橋本 喜久三 第四年

赤緑 村中 秀夫 村田 謙 醫科 第三年

黄緑 駒井 文定 騎井 良齊 第二年

紫黄 米澤 恭次 辻村 賴夫 第一年

傳へ言ふ香餌の下には死魚あり重賞の下には勇夫ありといでや勵氣一番今日の勇士を一瞥せんか練り出したる十四人の健兒よしや風貌は異るども而かも皆庸中の微々たる者彼れ若し蜚廉の

術を尽さば我豈張遼の勇を鼓せざらんや見よ見

よ彼等撰手は砲彈の如く驅け出せり綠冕赤を披

けは赤に援聲破れ赤冠黃を披けば黃に鯨波湧く

一步一挺一跬一勝背後風を生じて踵々相接す一

周は終れり二周は來れり萬雷闇を破てへピーを

行る恰も見よ短身黒鉄の如き榎戸氏はさながら

韋駝天の荒れたる如く馬蹄八州風塵を蹴て眞一

文字に驅けぬけ驅けぬけ大噴火山は破裂せしが

如き大叫喚の中に迎へられたる有様は正に是れ

神龍雲を呼て九天に吟ぎ猛虎風に逸して寒山に

嘯くは概

一等 榎戸 利吉 二等 田宮 春策

三等 米澤 忝次

今や夜氣漸く長けて場内數團の篝火は點せられぬ火光爛々天蓋を燒いて城後の雉鼻を驚かし銀漢星稀にして清氣人に薄る此時北條會長は風手嚴然として壇上に立ち破顔一笑今日の盛會を祝

して曰く

馮夷徒々に權を弄してけふやあすと延滞せし

我陸上大運動會も終に朗々風暖ある今辰を下

して而かも此尤盛無比の快況を職るを得たる

は全く委員諸君の勉勵と幹旋との然らしめし

に外ならず故に余は本會長として一言此に及

ばざるを得ざるなり因て余は今兩陛下の聖壽

を祈り奉り併せて我運動會の萬歳を祝すべし

れば諸君須く余に和せよ

と乃ち勵聲一番聲に應じて相和し萬歳々々の聲

は正に四邊に徹せり是に於て會長は菓果數策を

饗して幹旋の勞を慰し拐然たる枯腸は八珍の美

味を知て霽々たる和氣自ら溢れ清快幾ど人寰の

ものに非ず遂に各々胸を叩て撰士の勇を頌し或

は地を蹶て今日の快技を議し放歌高吟乃ち場を

開けば餘韻幽のに尾上城岨に在り(紫水)

本誌を何に世わたる家五軒

蕪村

# 投書心得

- 一 投書は本會原稿用紙に限り御認めありたし
- 一 長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せざ
- 一 雑誌上より雅號のみを記載することを許せども姓名を必ず編輯委員まで御報道あるべし
- 一 學理上の論說諸小會の記事雅文詩歌等續々寄投ありとて勿論言の或は政治を論じ或は徳義に背くもの一切掲載致さざるべし

明治三十一年十二月二十日印刷  
 全 年十二月廿二日發行

編輯兼發行者

松村大吉

金澤市長町川岸五番地清水祇世方

印刷者

佐々木惣一

金澤市川上新町三丁目二番地松本凌方

發行所

第四高等學校北辰會

印刷所

活版會社

金澤市高岡町三十四番地

